

令和 7 年度
学校安全総合支援事業報告書

石巻市教育委員会

学校安全総合支援事業実践報告書 目次

I 事業の概要及び具体的な取組	1
1 地域の実態	1
2 防災に関すること（事業概要）	1
3 交通安全に関すること（事業概要）	3
4 防犯を含む生活上の安全に関すること（事業概要）	4
II 防災に関する取組	5
1 緊急地震速報受信機の設置状況とその活用について	5
（1）緊急地震速報受信機について	5
（2）緊急地震速報受信機の設置状況について	6
（3）緊急地震速報受信機の活用について	7
2 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の取組	9
【平成24年度設置校】 ※実践的防災教育総合支援事業により設置	
・石巻市立石巻小学校	10
・石巻市立鹿妻小学校	12
・石巻市立広瀬小学校	14
・石巻市立鮎川小学校	16
・石巻市立住吉中学校	18
・石巻市立北上中学校	20
【平成25年度設置校】 ※実践的防災教育総合支援事業により設置	
・石巻市立住吉小学校	22
・石巻市立貞山小学校	24
・石巻市立鹿又小学校	26
・石巻市立大原小学校	28
・石巻市立万石浦中学校	30
・石巻市立飯野川中学校	32
【平成26年度設置校】 ※実践的防災教育総合支援事業により設置	
・石巻市立湊小学校	34
・石巻市立渡波小学校	36
・石巻市立万石浦小学校	38
・石巻市立大谷地小学校	40
・石巻市立和瀬小学校	42
・石巻市立湊中学校	44
・石巻市立青葉中学校	46
【平成27年度設置校】 ※実践的安全教育総合支援事業により設置	
・石巻市立寄磯小学校	48
・石巻市立石巻中学校	50
【平成28年度設置校】 ※実践的安全教育総合支援事業により設置	
・石巻市立北上小学校	52
・石巻市立牡鹿中学校	54
【平成29年度設置校】 ※実践的安全教育総合支援事業により設置	
・石巻市立雄勝小・中学校	56
・石巻市立渡波中学校	58

【平成30年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立大街道小学校		6 0
【令和元年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立釜小学校		6 2
・石巻市立二俣小学校		6 4
・石巻市立山下中学校		6 6
【令和2年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立開北小学校		6 8
・石巻市立中里小学校		7 0
・石巻市立河北中学校		7 2
【令和3年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立蛇田小学校		7 4
・石巻市立向陽小学校		7 6
・石巻市立飯野川小学校		7 8
【令和4年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立稲井小学校		8 0
・石巻市立稲井中学校		8 2
・石巻市立河南東中学校		8 4
【令和5年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立山下小学校		8 6
・石巻市立蛇田中学校		8 8
・石巻市立河南西中学校		9 0
【令和6年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立須江小学校		9 2
・石巻市立前谷地小学校		9 4
・石巻市立桃生小学校		9 6
【令和7年度設置校】	※学校安全総合支援事業により設置	
・石巻市立北村小学校		9 8
・石巻市立桃生中学校		1 0 0
・石巻市立桜坂高等学校		1 0 2
3 「復興・防災マップ」の取組		1 0 5
・石巻市立大谷地小学校		1 0 6
・石巻市立桃生小学校		1 0 8
・石巻市立万石浦中学校		1 1 0
Ⅲ 「交通安全の充実」に向けた取組		1 1 3
・石巻市立釜小学校		1 1 4
Ⅳ 「生活安全（防犯を含む）の充実」に向けた取組		1 1 7
・石巻市立中里小学校		1 1 8

I 事業の概要及び具体的な取組

石巻市教育委員会では、文部科学省からの委託（宮城県教育委員会からの再委託）を受け、令和7年度「学校安全総合支援事業」に取り組んでいる。

本事業では、「災害安全」で緊急地震速報受信機を設置した学校での避難訓練や「復興・防災マップ」の作成等を実施し、実践的な防災教育の充実に向けて取り組んできた。「交通安全」では、市内の小学校1校を実践協力校に指定し、アドバイザーからの指導・助言を仰ぎながら、「交通安全に関する授業」の実践や、体験的な活動を通して学区内の交通危険箇所に関する気付きを発表し、保護者や地域住民等と共有する活動に取り組んだ。「生活安全」では、市内の小学校1校を実践協力校に指定し、「防犯カメラ」を活用した不審者の早期発見と迅速な通報ができるよう、警察の生活安全課や駐在所などの協力による不審者対応避難訓練を実施してきた。

セーフティプロモーションスクール（SPS）認証に向けた取組については、小学校2校を認証支援校として推薦し、大阪教育大学学校安全推進センターの先生を招聘して、認証のための取組を進めてきた。本市では、今回の2校を含めるとSPS認証校は19校となる。さらに、今年度はSPS認証校が近隣の学校と連携し、学校安全の取組の推進を図る「安全協働学区」について、核となる中学校1校及び学区内の小学校2校を推薦し、認証に向けて取組を進めた。

以下に事業概要及び具体的な取組を記するとともに、各学校での取組を紹介する。

1 地域の実態

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、石巻市は甚大な被害を受け、多くの尊い命が失われた。インフラ等の復旧・復興はかなり進んだものの、震災を直接的に経験していない児童生徒への「震災の伝承」が課題の一つとなっている。「災害安全」においては学校地域防災連絡会の設置率が100%に達し、地域との協働による防災の取組も推進されつつある。

「交通安全」においては、震災復興のために新しい街や道路、橋が整備され、車での移動の際は利便性が高まったが、反面、児童生徒が被害者となる交通事故は後を絶たない状況である。

「生活安全」に関しては、市内における不審者の出没が数多く報告されており、校地内はもちろんのこと、住宅地や商店街、公園、駅周辺、路地裏等において関係機関と連携しながら不審者対策に努めている。

2 防災に関すること（事業概要）

1 概要

児童生徒等が災害から自らを守るために、主体的に行動する態度を育成することをねらいとし、市立小・中・高等学校3校に緊急地震速報受信機を導入して、緊急地震速報を活用した避難訓練を実践した。この避難訓練では、緊急地震速報受信機の効果的な活用を目指すことはもちろんのこと、「保護者・地域住民によるチェックリストを活用した第3者評価」「訓練アドバイザーによる指導助言」も取り入れた。

「復興・防災マップづくり」については総合的な学習の時間等を活用し、特に実践協力校となる3校はアドバイザー（大学教授）からの指導助言や授業支援を受けながら取組の充実を図った。このような実践を通して、各校では地域の自然や歴史、復興や防災に関する情報収集に取り組み、地域の良さや魅力を再認識しながら、地域の未来のために貢献しようとする態度の育成を図った。

セーフティプロモーションスクールについては全ての市立学校の認証を目指し、今年度は小学校2校を認証申請支援校に指定し、学校防災への意識を高めるための実践的な取組を行った。また、既にSPS認証を受けている中学校及びその学区内にある小学校2校を「安全協働学区」の指定校とし、小中学校で連携を図りながら学校安全の取組を推進した。

2 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の取組

＜実践的な取組を実施した学校名＞

・石巻市立北村小学校 ・石巻市立桃生中学校 ・石巻市立桜坂高等学校

＜緊急地震速報受信機を活用した避難訓練訪問＞

・期 日：令和7年10月10日（金）、10月29日（水）

- ・場 所：１０月１０日 桜坂高等学校
１０月２９日 北村小学校、桃生中学校
 - ・助言者：宮城教育大学教育学部（防災教育研修機構兼務） 講師 林田 由那 氏
- ＜第４回防災主任研修会兼学校安全対策研修会での実践発表＞
- ・期 日：令和８年１月１６日（金）
 - ・場 所：遊楽館
 - ・講 評：宮城教育大学教育学部（防災教育研修機構兼務） 講師 林田 由那 氏

３ 復興・防災マップの取組

＜実践的な取組を実施した学校名＞

- ・石巻市立大谷地小学校 ・石巻市立桃生小学校 ・石巻市立万石浦中学校

＜実践校訪問指導及び第１回実践委員会＞

- ・期 日：令和７年７月２４日（木）
- ・場 所：①大谷地小学校、②桃生小学校、③万石浦中学校
- ・助言者：①：東北大学災害科学国際研究所 教授 佐藤 健 氏
②及び③：東北大学災害科学国際研究所 特任教授 村山 良之 氏

＜授業実践・参観及び第２回実践委員会＞

- ・期 日：令和７年９月９日（火）、９月２６日（金）
- ・場 所： ９月 ９日 桃生小学校
９月２６日 大谷地小学校
- ・助言者： ９月 ９日 東北大学災害科学国際研究所 特任教授 村山 良之 氏
９月２６日 東北大学災害科学国際研究所 教授 佐藤 健 氏

＜第４回防災主任研修会兼学校安全対策研修会での実践発表＞

- ・期 日：令和８年１月１６日（金）
- ・場 所：遊楽館
- ・講 評：東北大学災害科学国際研究所 教授 佐藤 健 氏、桜井 愛子 氏

４ ＳＰＳ認証及び安全協働学区に向けた取組

＜実践的な取組を実施した学校名＞

- ・ＳＰＳ：石巻市立住吉小学校・石巻市立開北小学校
- ・安全協働学区拠点校：石巻市立住吉中学校

＜認証に向けた実地確認＞

- ・期 日：令和７年９月２５日（木）
- ・場 所：住吉小学校、開北小学校
- ・助言者：日本セーフティプロモーションスクール協議会 理事長 藤田 大輔 氏

＜認証に向けた実地審査＞

- ・期 日：令和７年１２月１６日（火）、１２月１７日（水）
- ・場 所：住吉小学校、開北小学校、住吉中学校
- ・審 査：日本セーフティプロモーションスクール協議会 理事長 藤田 大輔 氏

＜第４回防災主任研修会兼学校安全対策研修会での実践発表＞

- ・期 日：令和８年１月１６日（金）
- ・場 所：遊楽館
- ・講 評：東北大学災害科学国際研究所 教授 佐藤 健 氏、桜井 愛子 氏

５ 取組における成果と今後の課題

＜緊急地震速報受信機を活用した防災教育の取組の成果と課題＞

- ・平成２４年度から令和７年度までの１４年間で緊急地震速報受信機を市内４８校に設置することができ、令和７年度をもって全ての市立小学校・中学校・高等学校への設置が完了した。
- ・新規設置校の３校では、緊急地震速報受信機を活用した訓練に取り組むことはもちろんのこと、「保護者、地域住民等による第三者評価」も取り入れた。ＰＴＡ役員や学校運営協議会委員など、様々な視点からの評価を得ることができた。
- ・設置校では、「海溝型地震（緊急地震速報あり）」と「内陸型地震（緊急地震速報なし）」を分けて訓練を行ったり、宮城県沖の震源を想定して１０秒程度のリードタイムを設け

たりするなど、より実践的な訓練を目指して緊急地震速報受信機を活用している。

- ・緊急地震速報受信機のより効果的な活用方法や訓練以外の活用方法など、モデルとなる学校の実践や教育委員会からの提案を広く発信し、緊急地震速報受信機の有用性を共有していきたい。

＜復興・防災マップの取組の成果と課題＞

- ・マップづくりの際のまち歩きを通して、児童生徒は震災当時の被害状況や身近にある安全な場所、災害時に役立つ施設などがあることに気付き、自分たちが住む街を防災の視点で見つめ直すとともに、ふるさとのよさを再認識することができた。
- ・地域の方から話を聞いたりインタビューしたりする活動を通して、震災時の様子を実感的に理解することができた。
- ・東日本大震災から15年が経過しようとしており、小中学校では震災を直接的に経験していない児童生徒だけになる。今後も地域の方々の協力を得たり、伝承施設を活用したりしながら、震災の伝承に努めていく必要がある。

＜SPS認証及び安全協働学区の取組の成果と課題＞

- ・日本SPS協議会・理事長の藤田氏による審査では、共通して「児童生徒による安全点検の実施」「保護者や地域を巻き込んだ学校安全の推進」について貴重なご助言をいただいた。このことを意識しながら、今年度の認証校7校は児童生徒や保護者、地域の方々による学校安全の取組を充実させることができた。

3 交通安全に関すること（事業概要）

1 事業の概要

児童が地域の交通事情に関心を持ち、進んで地域の危険箇所を見付け、登下校時や日常の中に潜む様々な危険を予測し、正しい判断をしながら安全に行動する能力を養う。

2 「交通安全の充実」に向けた取組

＜実践的な取組を実施した学校＞

- ・石巻市立釜小学校

＜実践校訪問指導及び第1回実践委員会＞

- ・期 日：令和7年7月28日（月）
- ・場 所：釜小学校
- ・助言者：東北工業大学 教授 小川 和久 氏
- ・参加者：小川教授（交通安全アドバイザー）、校長、教頭、安全主任、第4学年主任、市教委学校安全推進課指導主事

＜授業参観及び第2回実践委員会＞

- ・期 日：令和7年9月9日（火）
- ・場 所：釜小学校
- ・助言者：東北工業大学 教授 小川 和久 氏
- ・参加者：小川教授（交通安全アドバイザー）、校長、教頭、安全主任、市教委学校安全推進課指導主事

＜第4回防災主任研修会兼学校安全対策研修会での実践発表＞

- ・期 日：令和8年1月16日（金）
- ・場 所：遊楽館
- ・講 評：東北工業大学 教授 小川 和久 氏（小川氏欠席のため講評を代読）

3 取組における成果と今後の課題

- ・小学校3年生の発達特性を考慮した上で、段ボールを左右に積み重ねて「見通しの悪い交差点」を教室内に再現し、実際にその間を歩行させることで、児童は「見通しが悪い状況」や「事故が起きやすい状況」を体験的、客観的に理解することができた。
- ・日常生活を振り返りながら「飛び出しが起きる状況」を考えさせる活動を通して、児童は物的要因や心理的要因など、様々な視点から飛び出してしまう場面に気付き、交通事故のリスクについて考えることができた。
- ・安全意識が向上しても、行動（安全確認を含む）が変わらなければ安全性は向上しない。

児童生徒の行動に安全性の問題があれば、その場面と行動選択を照らし合わせて考えさせる必要がある。

- ・交通安全の取組は、「学校、家庭、地域」の枠組みの中で推進していく必要がある。地域や保護者と危険箇所を共有したり、児童と保護者が一緒に学べる場を設けたりするなど、今後様々なアプローチを試みてほしい。

4 防犯を含む生活上の安全に関すること（事業概要）

1 事業の概要

不審者が校内に侵入した場合や児童が不審者に遭遇した場合の非常時の駆け込み体制を整備し、学校内外での安全・安心の確保を図る。

2 「生活安全（防犯を含む）の充実」に向けた取組

＜実践的な取組を実施した学校＞

- ・石巻市中里小学校

＜実践校訪問指導及び第1回実践委員会＞

- ・期 日：令和7年7月7日（月）
- ・場 所：中里小学校
- ・助言者：宮城教育大学教育学部（防災教育研修機構兼務） 講師 林田 由那 氏
- ・参加者：林田講師（生活安全アドバイザー）、校長、教頭、安全主任、市教委学校安全推進課指導主事

＜不審者対応避難訓練及び第2回実践委員会＞

- ・期 日：令和7年10月30日（木）
- ・場 所：中里小学校
- ・助言者：宮城教育大学教育学部（防災教育研修機構兼務） 講師 林田 由那 氏
- ・参加者：林田講師（生活安全アドバイザー）、石巻警察署生活安全課職員、校長、教頭、安全主任、市教委学校安全推進課指導主事

＜第3回防災主任研修会での実践発表＞

- ・期 日：令和7年11月26日（水）
- ・場 所：マルホンまきあーとテラス
- ・講 評：宮城教育大学教育学部（防災教育研修機構兼務） 講師 林田 由那 氏

＜第4回防災主任研修会兼学校安全対策研修会での実践発表＞

- ・期 日：令和8年1月16日（金）
- ・場 所：遊楽館
- ・講 評：宮城教育大学教育学部（防災教育研修機構兼務） 講師 林田 由那 氏

3 取組における成果と今後の課題

- ・防犯カメラを活用した不審者の確認や1階に教室がある1・2年生の上階への避難、児童と教職員による教室内でのバリケード設置など、訓練を通して様々な取組を試み、その効果や課題を明らかにすることができた。
- ・トランシーバーを活用した職員間の情報伝達が円滑であった。また、複数人で不審者への対応を行い、さすまたを効果的に使用しながら迅速に不審者の動きを封じ込めることができた。
- ・不審者対応に係る応援を呼ぶ場合は、目的を明確に伝えることで「だれが行くか」「何を用意するか」など、具体的な対策を講じることができる。
- ・不審者への対応はさすまただけで行うのではなく、ほうきや傘、ベルトなど、身の回りの物を効果的に使う「フェーズフリー」の考え方を生かしたい。
- ・今後も訓練を通して不審者対策の強化を図るとともに、「平時の安全管理（不審者を敷地や校舎内に入れない、来校者の確認など）」の徹底を図る必要がある。

Ⅱ 防災に関する取組

1 緊急地震速報受信機の設置状況について

(1) 緊急地震速報受信機について

①緊急地震速報の仕組み

地震による初期微動（P波）と主要動（S波）には伝達速度に違いがあり、P波が先に伝わる。その差を利用し、大きな揺れを伴うS波が到達する前に地震の発生を知らせる情報が、緊急地震速報である。震源に近い地震計がP波を観測すると、そのデータは気象庁に送信され、震源の位置や地震の規模（マグニチュード）を予測し、各地のS波到達時刻と震度を予想して緊急地震速報として発表される。

最大予測震度が5弱以上である場合に発表される一般向けの緊急地震速報（警報）と、マグニチュードが3.5以上、又は最大予測震度が3以上である場合等に発信される高度利用者向けの緊急地震速報（予報）がある。

②導入機種について

本事業で導入したのは、「緊急地震速報発報端末 地震の見張り番 Touch」である（株式会社センチュリー社製）。

高度利用者向け緊急地震速報を受信し、現地演算方式により登録した設置場所ごとの情報を提供するほか、次のような特長がある。



・放送設備との連動、自動制御

緊急地震速報を受信すると、到達までの時間と予測される震度を画面に表示し、同時に音声で通知する。さらに、設定震度以上の地震が予想される場合は、自動的に校内放送設備を立ち上げ、音声により通知する。

・シミュレーション訓練機能

任意の震度と到達時間を設定して訓練することができる。また、過去の地震データが登録されており、再現シミュレーションで訓練をすることができる。

・津波情報の受信

気象庁から津波・地震情報が発表された場合は、緊急地震速報と同様に画面、音声、校内放送で通知する。

※本市においては、緊急地震速報受信機の設置を平成24年度から開始し、毎年計画的に設置校を増やしてきた。令和7年度も3校への設置が完了し、これをもって、石巻市立の全ての学校（小学校、中学校、高等学校）への設置が完了した。

(2) 緊急地震速報受信機の設置状況について（設置校一覧）

No.	設置年度	設置校	備 考
1	平成24年度	石巻市立石巻小学校	
2	平成24年度	石巻市立鹿妻小学校	
3	平成24年度	石巻市立広瀬小学校	
4	平成24年度	石巻市立鮎川小学校	
5	平成24年度	石巻市立住吉中学校	
6	平成24年度	石巻市立北上中学校	
7	平成25年度	石巻市立住吉小学校	
8	平成25年度	石巻市立貞山小学校	
9	平成25年度	石巻市立鹿又小学校	
10	平成25年度	石巻市立大原小学校	
11	平成25年度	石巻市立万石浦中学校	
12	平成25年度	石巻市立飯野川中学校	
13	平成26年度	石巻市立湊小学校	
14	平成26年度	石巻市立渡波小学校	
15	平成26年度	石巻市立万石浦小学校	
16	平成26年度	石巻市立大谷地小学校	
17	平成26年度	石巻市立和瀬小学校	
18	平成26年度	石巻市立湊中学校	
19	平成26年度	石巻市立青葉中学校	
20	平成27年度	石巻市立寄磯小学校	
21	平成27年度	石巻市立石巻中学校	
22	平成28年度	石巻市立北上小学校	
23	平成28年度	石巻市立牡鹿中学校	
24	平成29年度	石巻市立雄勝小学校	
25	平成29年度	石巻市立雄勝中学校	
26	平成29年度	石巻市立渡波中学校	
27	平成30年度	石巻市立大街道小学校	
28	令和元年度	石巻市立釜小学校	
29	令和元年度	石巻市立二俣小学校	
30	令和元年度	石巻市立山下中学校	
31	令和2年度	石巻市立中里小学校	
32	令和2年度	石巻市立開北小学校	
33	令和2年度	石巻市立河北中学校	
34	令和3年度	石巻市立蛇田小学校	
35	令和3年度	石巻市立向陽小学校	
36	令和3年度	石巻市立飯野川小学校	
37	令和4年度	石巻市立稲井小学校	
38	令和4年度	石巻市立稲井中学校	
39	令和4年度	石巻市立河南東中学校	
40	令和5年度	石巻市立山下小学校	
41	令和5年度	石巻市立蛇田中学校	
42	令和5年度	石巻市立河南西中学校	
43	令和6年度	石巻市立須江小学校	
44	令和6年度	石巻市立前谷地小学校	
45	令和6年度	石巻市立桃生小学校	
46	令和7年度	石巻市立北村小学校	
47	令和7年度	石巻市立桃生中学校	
48	令和7年度	石巻市立桜坂高等学校	

2 緊急地震速報受信機の活用について

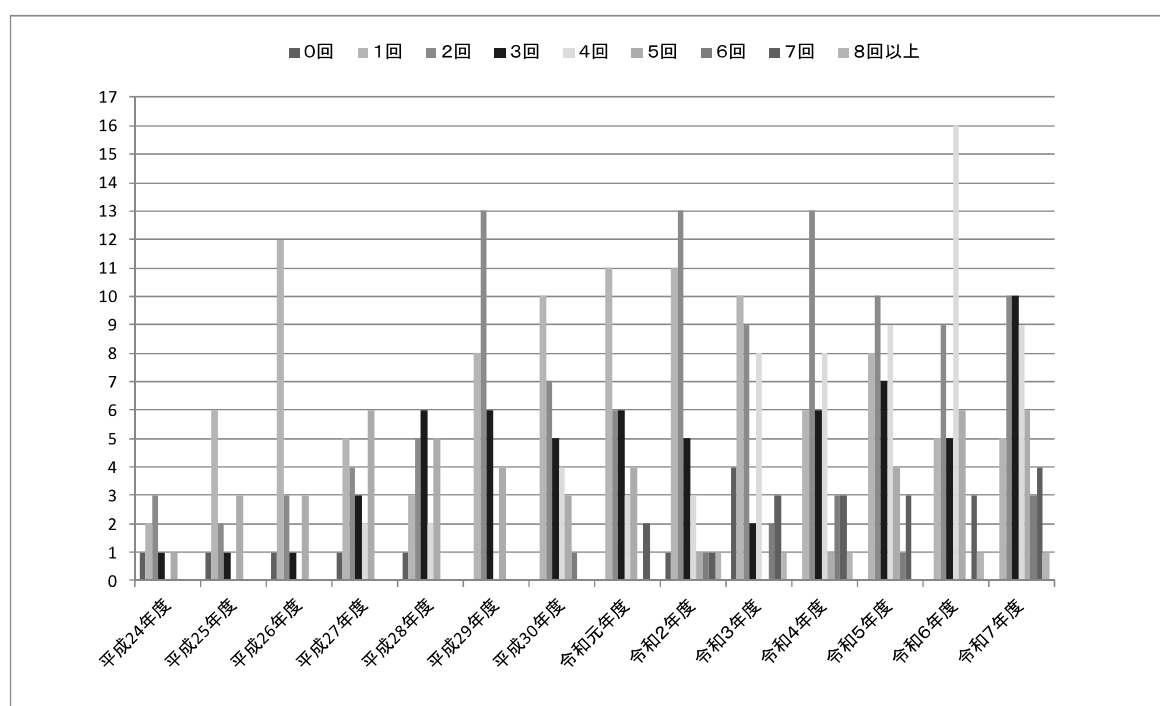
(1) 令和7年度新規設置校における取組

令和7年度の新規設置校3校（北村小学校、桃生中学校、桜坂高等学校）においては、「緊急地震速報受信機のより効果的な活用」及び「実践的・実効的な訓練の実施」を目指し、以下の取組を行った。

- ①緊急地震速報受信機を活用することで得られる、地震の主要動が到達するまでの「リードタイム」を生かした避難訓練計画の検討及び避難訓練の実践。
- ②「緊急地震速報受信機を活用した避難訓練」に関する第三者評価（保護者、地域住民等）の実施及び「避難訓練チェックリスト」の活用。
- ③訓練アドバイザー、林田由那氏（宮城教育大学・講師）による避難訓練の参観及び指導助言。

(2) 全設置校における緊急地震速報受信機の活用状況

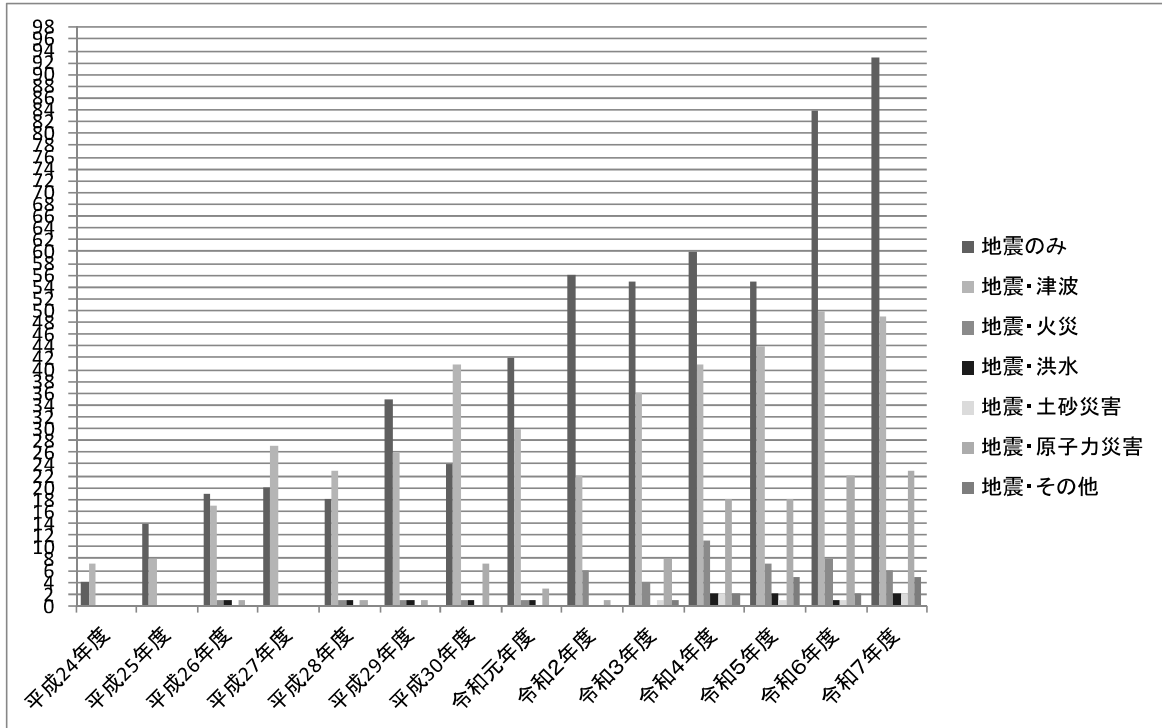
①緊急地震速報受信機を活用して避難訓練をした回数



<まとめ>

- ・緊急地震速報受信機設置校では、受信機を活用した避難訓練の平均実施回数は3.6回（前年度比-0.1）で、やや減少傾向であった。
- ・「全ての訓練」に占める「受信機を活用した訓練」の割合（活用率）は45.1%であった。
- ・3回以上活用した学校は33校（前年度比+2校）で、複数回にわたって積極的に受信機を活用した訓練に取り組んでいる学校が着実に増えている。
- ・繰り返し緊急地震速報受信機を活用することで、児童生徒は自分がいる場所に応じて「机の下に身を寄せる」「その場でダンゴムシのポーズ」など、自分で判断して身を守る行動が取れるようになってきた。

②緊急地震速報受信機を活用した避難訓練に係る災害想定

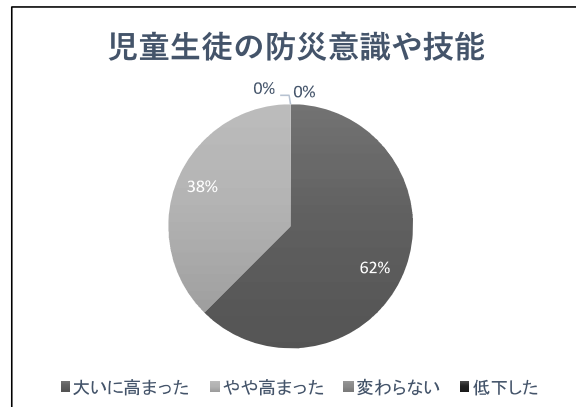
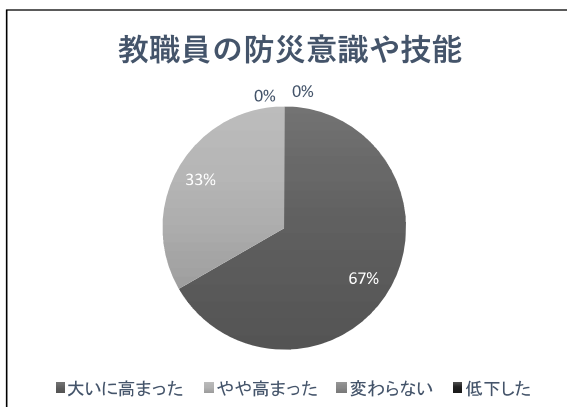


<まとめ>

- 緊急地震速報受信機を活用した避難訓練は、「地震のみ」を想定した「基本的な訓練」の回数が着実に増加しており、「授業時間」の訓練に限らず「休憩時間」や「清掃時間」、「部活動中」など多様な場面での訓練に活用されるようになってきている。
- 「その他」の内容として「地震発生時の情報収集」が複数校から挙げられており、震源地や震度の確認など、訓練以外にも活用を広げていることがうかがえる。

(3) 緊急地震速報受信機の活用に係る成果と課題

①緊急地震速報受信機の活用に係る評価



<まとめ>

- 緊急地震速報受信機の活用に係る評価については、教職員、児童生徒ともに肯定的評価が100%に達しており、このことは大きな成果と言える。
- 今後は、緊急地震速報受信機のような活用方法やその成果等を設置校間で共有し、より効果的な活用及び質の高い訓練の実施を目指すとともに、児童生徒の「大いに高まった」の評価が高まるよう指導の充実を図る。

2 緊急地震速報受信機を活用した 防災教育の取組



石巻市立石巻小学校

所在地 石巻市泉町一丁目1番2号

在籍数 238人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、大きく「中央エリア（商店街）」「山の手エリア」「門脇エリア」に分けられ、「山の手エリア」を除いては東日本大震災での津波被害を受けている。

学校は、日和山の北側の低地に位置しており、東日本大震災においては床上30cm程度の津波被害を受けた。校舎については、平成22年度に耐震工事が完了しているため、地震による倒壊等の危険性は低いと言える。また、体育館は平成26年度に完成し、備蓄倉庫や太陽光発電等の防災施設・設備が完備されている。新たに発表された津波浸水想定では、学校付近は1m未満から3～5mに上方修正された。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		5回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	2回
		地震・津波	2回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	1回
		地震・原子力災害	0回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市作成の防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用し、避難訓練の意義や避難の仕方等について指導した。
- ・「安全の時間」（業前の時間年間10回）、防災集会を設定し、様々な災害や多様な場面での、より安全な避難の仕方等について指導している。
- ・各学級の地震想定避難訓練事前指導で、緊急地震速報の仕組みについて児童に指導し、緊急地震速報が鳴った場合には、「落ち着いて避難行動を取ること」「物が落ちてこない・倒れてこない・移動してこない場所



全校集会で避難の仕方を指導

に避難すること」を指導した。

② 訓練の取組状況

- ・訓練当日は、緊急地震速報受信機を使い、地震発生直前から素早く避難行動が取れるようにした。緊急地震速報のアラーム音を放送で流し、揺れが収まるまで机の下に身を隠して避難行動をとった。
- ・各教室には、児童用携帯マニュアルのコピー（児童が登下校の際、どの場所に避難しているかを記したもの）、引渡し用学級名簿、携帯ラジオ、予備用乾電池等を入れた「非常用持ち出し袋」を備え、担任は避難時に携帯するように共通理解を図っている。
- ・地震・津波想定避難訓練の際は、「大津波警報」が発表されたという想定で、石巻中学校まで三次避難を行った。その後、石巻中学校と合同で引渡し訓練を行った。



放送を聞き、素早く避難する様子

③ 事後指導等

- ・訓練の様子について具体的場面で振り返りを行うことができるよう、全校共通で「避難訓練振り返りカード」を作成し、事前指導や振り返りの際に活用・累積できるようにした。



6年生が1年生の手を引いて高台へ避難する様子

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報の音源は緊迫感があり、それを活用することで真剣に訓練に取り組むことができた。また、毎年、緊急地震速報受信機を活用した避難訓練を数回実施しているので、教室以外の場所であっても、混乱することなく児童は身を守ることができるようになってきた。
- 大きな揺れが来る場合には緊急地震速報が鳴り、事前に避難行動をとれることを知っておくことで、実際に地震が来た時でも落ち着いて行動する力が身に付いた。
- 緊急地震速報の放送が流れた場合、活動を止め、静かにし、放送内容をしっかりと聞くよう、繰り返し指導していく必要がある。
- 大きな地震が来たときは、余震が何度も来ることが予想されるので、緊急地震速報を繰り返し放送で流し、その度に避難行動を取る訓練を実施していく。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	地震が起きた際にどのような避難行動を取るのか、児童へ声掛けを落ち着いて行うことができるようになった。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	緊急地震速報が鳴っても、焦らず避難行動を取ることができるようになった。また、緊急地震速報の仕組みや意義について理解することができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立鹿妻小学校

所在地 石巻市鹿妻北二丁目2番1号

在籍数 264人

1 学校の概要（学校防災面）

学区の北部には、牧山丘陵（鹿妻山）を背負い、東部には田園地帯が広がっている。南部・西部は、石巻漁港に隣接する住宅地となっている。

平成23年3月11日の東日本大震災では、学区南部の住宅地と東部の田園地帯まで最高1.0mの津波が押し寄せてきた。その後、校舎が避難所となり最大で約1,800人が避難してきた。

現在でも学区内で地域の方が最優先で避難してくる避難場所の一つとなっている。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		7回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	5回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践（11月9日 石巻市総合防災訓練）

（1）訓練の概要

① 事前指導等

- ・年間を通し、朝の時間などを使った石巻市防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用した地震・津波から自分の身を守る指導を行った。
- ・朝会で防災主任を中心に地震だけでなく津波からも自分の身を守るよう指導した。
- ・避難訓練の前には防火扉を実際に自分で通過する訓練を行った。



防火扉の通過訓練(3年)

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報後に児童は各家庭で設定されている避難所への避難を行った（鹿妻小学校へ避難した児童が多かった）。
- ・避難してきた児童は、北校舎3階へ避難した。加えて渡波中学校の生徒や地域の方も避難してきた。
- ・津波に伴う火災が校舎で起こったことを想定し、5・6年生は、渡波稲井トンネルへの避難訓練を行った。
- ・1年生から4年生までの児童は、校舎で濃煙道体験を行った。また、校庭で消防署員から初期消火訓練や消防車の説明を受けた。



渡波稲井トンネル避難訓練(5・6年)



濃煙道体験（家庭科室）

③ 事後指導等

- ・石巻防災訓練の後に全児童・全教職員にGoogleフォームでのアンケートをとり指導を行った。
- ・避難訓練後に各クラスの担任が児童と訓練についての振り返りを行い、大切な要点をクラスで共有している。
- ・防災主任が中心となり、石巻防災訓練を振り返る資料を作成し、それを基に次年度の児童への指導へと生かしていく。



避難訓練後の事後指導(5年)

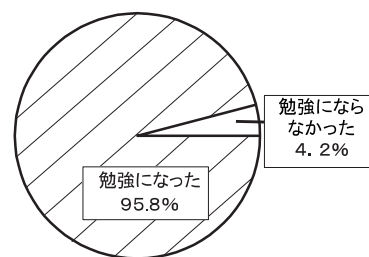
(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○前年度に比べ、緊急地震速報が鳴った時間帯に校舎に来ている児童・地域の方が大変少なかった（前年度多数）。

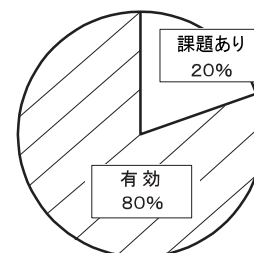
○津波からの避難場所として、鹿妻山だけでなく渡波稲井トンネルへの避難も有効であると理解できた。

●避難計画が学校だけに任されているので、次年度以降、行政・地域含めた三位一体になるような計画を策定していく。

●地域の方の訓練への参加が極端に少なかったため、次年度は地域防災連絡協議会の開催を早め、地域の方の多数の参加を促していく。



渡波稲井トンネルまで歩いて勉強になったか（5・6年）



石巻市総合防災訓練計画の有効性（教職員）

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	緊急地震速報があった時に、その後の指導について各避難訓練で成果・課題を確認し、次の避難訓練に生かしているため。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	沿岸部ということもあり、高学年児童を中心に地震だけでなく津波から身を守る意識が高いと感じているため。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立広渕小学校

所在地 石巻市広渕字町北233番地

在籍数 169人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、旧河南町にある5つの地区（町上、町下、柏木、砂押、新田）からなる。学区のほとんどが低地で、定川と青木川が1km以内の距離にあることから、大雨・洪水による浸水被害が想定される。学区内には高い建物がないため、浸水時は広渕小学校に避難するしかない。東日本大震災では、震度6弱だったが、津波による浸水はなかった。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		5回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	4回
		地震・津波	0回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
	その他（ ）		0回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・防災副読本「未来へつなぐ」を活用し、校庭や図書室などの教室以外の場所や、掃除の時間、給食時間、休み時間などのあらゆる場面を想定した避難行動の在り方を確認することができた。
- ・緊急地震速報が鳴ってから揺れが到達するまでのリードタイムで、命を守るためにとるべき行動について確認した。



廊下やホールでの避難

② 訓練の取組状況

- ・業間休みや掃除の時間に緊急地震速報の放送を流し、児童は各自で身の安全を確保する行動をとった。
- ・終了後にどんな場所においてどんな避難行動をとったか各学級で確認した。
- ・倒れやすいものや落ちてくる危険性があるものを避けて身の安全を確保することができたかを確認した。



児童のみの避難の様子

③ 事後指導等

- ・避難訓練後には、本校で活用している振り返りシートを活用し、事後指導を行った。
- ・避難訓練では、命を守るためにできなかったことがあってはならないことを確認し、反省点は次に必ず改善するように指導した。



教室での振り返りの様子

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 場面に応じた避難行動を自分たちで考えて実行に移すことができた。
- ショート訓練時、高学年が低学年に積極的に声を掛け、避難を誘導したり、安心するよう声掛けをしたりするなど、高学年らしい行動を取る児童の姿が見られた。
- 事前に職員研修の機会を設け、管理職や防災主任だけではなく、多くの職員が緊急地震速報受信機の使い方を理解することができた。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	学年に応じた事前指導と、避難時は的確な指示と行動ができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	放送をよく聞き、迅速に、落ち着いて行動することができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立鮎川小学校

所在地 石巻市鮎川浜清崎山 1 番地 1

在籍数 10 人

1 学校の概要（学校防災面）

本校の学区である鮎川浜は、「石巻市津波ハザードマップ―牡鹿地区南部―」によると、津波浸水想定が 5 m ～ 10 m となっている。しかし、校地は海拔 80 m 以上の高台に位置し、東日本大震災時も津波による浸水はなかった。

また、東北電力女川原子力発電所から約 11 km の距離にあり、原子力災害時の U P Z 避難指示区域に含まれている。

通学路の一部が土砂災害警戒区域に指定されているため、日常的な注意が必要である。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	3 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	3 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	2 回
	地震・津波	1 回
	地震・火災	0 回
	地震・洪水	0 回
	地震・土砂災害	0 回
3	地震・原子力災害	0 回
	その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・普段から「自分の命は自分で守る」といった意識を持つとともに、いざという時に自分の判断で具体的な行動が取れるようにするため、業前の防災タイム等で指導している。また、4 月に児童携帯防災マニュアルを作成している。

② 訓練の取組状況

- ・地震想定・引渡し訓練では、緊急地震速報受信機を作動させ、警報音を鳴らしたところ、児童は速やかに第一次避難を行うことができた。その後、津波警報が発表された

想定で校舎3階の鮎川ルームに二次避難を行った。慌てず、慎重に避難する様子が見られた。その後、津波警報が解除されるが、避難が長引くことが予想されるという想定で、より設備の整った清優館へ三次避難を行った。



引渡し名簿で確認（引渡し訓練）

- ・清優館では、牡鹿中学校と合同で引渡し訓練を行った。受付で確認する引渡し名簿と、大きく印刷した掲示用の引渡し名簿の2重でチェックをし、誰に引渡しのか、どこに避難するのかを確認しながらスムーズに引渡しを行うことができた。



清掃場所の机の下で身を守る児童

- ・清掃時間中の地震想定避難訓練では、緊急地震速報受信機の警報音が鳴ると同時に、清掃場所の机の下に入ったり、ダンゴムシのポーズで頭を守ったりして、すばやく身を守ることができた。

③ 事後指導等

- ・地震想定・引渡し訓練では、清優館への避難が終了したところで、警報音後の行動、校舎内、清優館への移動について全体講評を聞き、振り返りを行った。
- ・清掃時間中の訓練では、児童の避難行動の妥当性を「4つの『ない』」に当てはまっていたのかという視点で確認した。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○児童は、緊急地震速報受信機の放送が流れるとすぐに、身を守る行動をとることができた。

○引渡し訓練では、教員、児童、保護者がしっかりと流れを確認することができた。

●緊急地震速報受信機の警報音が鳴ってから、安全な場所へ移動する時に、実際は歩けないくらいの震度であるということを考えて行動できるように指導していく。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	常日頃から防災意識を持ち、命を守るための指導、声掛けをしており、緊急地震速報受信機の警報音が鳴ると同時に職員も身を守りながら適切な指導ができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	自分で考えて身を守る行動ができているが、より安全な行動を考えて訓練を積み重ねていく必要がある。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立住吉中学校

住 所 石巻市東中里三丁目3番1号

在籍数 199人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、市の北東部に位置し、旧北上川の懷に抱かれた平坦地である。また、学区の大部分は低地にあり、地形図上では本校は氾濫平野にある。

東日本大震災により地域のほとんどが冠水し、被害を受けた地域である。当時避難所であった本校には、最大2,100名が避難していた。

地域や保護者は教育熱心で、学校に対しても協力的である。平成30年3月に本校は、日本セーフティプロモーションスクール（SPS）協議会より、教職員、生徒、保護者、地域の人々が協働して学校安全推進の取組を展開するSPS認証校に認定された。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	5回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	4回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	1回
	地震・津波	1回
	地震・火災	1回
	地震・洪水	0回
	地震・土砂災害	0回
	地震・原子力災害	1回
	その他（洪水・浸水）	1回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・4月22日の5校時に全校放送で安全担当教員が1年間の防災学習のオリエンテーションを行い、そのねらいである「自他の命を守る力を身に付けること」への理解を深めることができた。また、タブレット（生活のしおり）にある安全・防災資

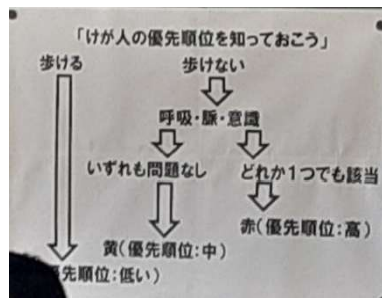


防災学習オリエンテーション

料を活用しながら、避難訓練における避難経路等の事前指導を行った。

② 訓練の取組状況

- ・6月10日の6校時に行った緊急地震速報による避難訓練は、より実践的な訓練にするために、緊急地震速報の報知音の度に、机の下に入る訓練を行った（余震の回数を生徒には伝えないで実施）。
- ・「骨折する生徒」「膝を擦りむく生徒」「過呼吸になる生徒」が出たという設定で訓練を実施した。教員と生徒が協力しながら、優先順位のフローチャートに従



けが人の優先順位カード

ってけが人の対応をし、必要に応じて本部に応援を要請しながら一次避難を行った。

③ 事後指導等

- ・避難訓練終了後、クラスごとに担任が事後指導を行った。生徒の振り返りは次のとおりである（一部抜粋）。
「実際にけがや具合が悪くなる人が出たら、見ていないで自分が動くのが大事だと思った。」
「けが人に優先順位があることが分かった。」
「複数回地震が来るなど最悪のケースを考えて備えることが大事だと思いました。」

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- けが人を想定し、優先順位をつける訓練が実践的であった。教員の動きとしても、けが人に対して適切な対応ができていた。様々な状況下での訓練があると、忘れかけていたことも再確認することができてよかった。
- 余震あり（緊急地震速報を予告なしで繰り返し流す）のスタイルは、生徒は驚きつつも真剣に取り組んでいた。また、実際に起こり得ることだと考える生徒も多く、今後の災害への心構えを再認識させる機会となった。
- 別室対応の生徒（不登校生徒）については出席状況の確認が必要である。不規則な登校時間や日々変わる出席状況を学年だけでなく職員全体で確実に把握しなければならない。
- 非常勤の職員や支援員等も含めて、特別教室の利用状況、各階の教職員の人数の把握など、様々な状況を想定した訓練計画も必要である。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	各フロア、各学年主任のリードの下、迅速かつ適切な対応を目指して訓練に臨むことができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	9割強の生徒がしっかりとした取組や理解の深まりが見られるものの、更に訓練を継続し、主体的に行動できる個々の技能を高める工夫が必要である。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立北上中学校

所在地 石巻市北上町十三浜字小田 9 3 番地 1

在籍数 4 4 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、旧北上町全域で東西に長く、通学範囲が広い。スクールバス通学の生徒は約 3 割で、その他は保護者送迎が多いため、交通事故に対する注意が必要である。

校舎は高台にあるが、通学路が北上川や海岸線沿いの海拔の低い場所が多いので、津波等に対する意識を高めていく。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		8 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		2 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	0 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・地震発生時には、緊急地震速報が流れることや一次避難方法（机の下に隠れて頭部を守る、ダンゴムシのポーズ、ヘルメットの着用など）を指導した。
- ・揺れが収まったら、状況に応じた避難行動をとることを指示した。

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報受信機を使って、職員室にいる教職員が発報した。
- ・生徒は教室で一次避難を行う。職員室内の教職員も一次避難を行う。
- ・揺れが収まったら、校長（教頭）の指示で、校舎内外の被害状況を確認する。

- ・被害状況に応じた避難場所を決定し、教職員並びに生徒に伝える。
- ・安全を確認しながら、二次避難を行う。原子力災害の二次避難場所は、視聴覚室とした。
- ・職員室にいる教職員は、非常持出袋を持つ。
- ・二次避難場所で、人数確認と報告を行う。
- ・石巻市総合防災訓練内で行う防災発表に向けて、地域の方から東日本大震災当時の話を聞き、新聞作成を行った。自分たちの住んでいる地区での出来事について興味を持って聞くことができた。
- ・委員会企画の避難訓練を行い、生徒が主体的に災害対応を考える機会を設けた。
- ・アクションカードの活用により、とるべき行動の明確化、行動が被らないようにする合理化、素早い対応ができるようになった。



地震避難訓練時の様子



シェイクアウト訓練の様子

③ 事後指導

- ・校長（教頭）からの講評後、教室で石巻市防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用したり、振り返り用紙に記入したりしながら、各自振り返りを行った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○いつでもどこにいても迅速な避難行動をとることについて考えさせることができる取組となった。

●通学中や外出中の対応についても想定して考えさせる必要性がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	アクションカードを利用したことで、災害発生時の素早い対応を意識することができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	委員会企画で避難訓練を行ったり、地域の人から震災の話を聞いたりするなど、防災意識の高揚が見られた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立住吉小学校

所在地 石巻市住吉町二丁目4番27号

在籍数 104人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、石巻市の中心部に位置し、旧北上川沿いの氾濫平野にある。近くの中里バイパス周辺は旧河川が伸びている。

校地は、北上川から50mの海拔0.7mの平地のため、浸水被害を受けやすい場所と言える。

東日本大震災では、全児童と職員が校舎3階に避難し、無事だった。北上川からの汚泥を伴う水が押し寄せ、校舎1階が浸水し使用不可となった。校舎内には翌年の6月まで避難所が開設された。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		8回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実回数		4回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震・停電	1回
		地震・津波	1回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
		その他（保護者への引渡し訓練1回 ショート訓練1回）	2回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・津波情報の受信 ・地震の規模や震源地等に関する情報収集に活用	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・毎月、第2火曜日の業前に「防災タイム」を設定し、上学年、下学年に配付されている石巻市防災副読本「未来へつなぐ」を活用した防災教育を行っている。それぞれ3年間で指導しない項目がないように年間指導計画に沿って、計画的に指導している。



校庭への避難経路を確認する様子

- ・4月上旬に避難経路(各教室から校庭及び屋上)の確認を全学年で行った。

② 訓練の取組状況

- ・一次避難の際、児童は、机の下に避難したり、低い姿勢で頭を守る姿勢をとったりするなど、身の安全を確保することができた。
- ・二次避難の際「お・は・し・も」の約束を守り、安全に避難することができた。
- ・集合場所で担任が児童の様子を観察することで安心感を与え、児童は静かに待つことができた。



一次避難の様子

③ 事後指導等

- ・各自がどのような避難行動をしたか振り返った。また、避難の指示をしっかりと聞くことができていたかについて確認した。
- ・職員は、各自の避難行動や指示、誘導が適切であったか振り返り、後日、共通理解を図った。



校舎3階に避難している様子

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 緊急地震速報の音が鳴った時点で、放送による指示をよく聞こうとする態度が養われているため、緊張感をもって訓練に取り組むことができた。
- 住吉中学校区の小中学校で引渡し訓練を行った。事前に車両の通行方法の周知を図ったため学校周辺は交通渋滞なく実施することができた。
- 今年度は、各避難訓練の日時を職員、児童に周知して実施した。来年度は、発災時に備え、予告なしの避難訓練の実施を検討したい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	・各学年で石巻市防災副読本を活用し、事前・事後の指導を行った。 ・一次避難では机の下に避難するなど、自身の身を守る行動をとることができていた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	・日常の整理・整頓、上靴をきちんと履くことが安全な避難につながることを指導している。しかし、身の回りの整頓ができていない児童や上靴のかかとを踏んでいる児童が見られる。引き続き、声掛けや個別指導が必要である。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立貞山小学校

所在地 石巻市貞山五丁目3番1号

在籍数 171人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、洪水ハザードマップによると、予想浸水深は0.5～3mであり、風水害発生時は、学区のほとんどが冠水することが予想される。津波においても同様で0.5～3mの予想となっており、学区内の全ての地域が浸水域に入る。浸水の継続時間は想定最大規模で1～3日未満となっている。

学校は、2011年の東日本大震災で1階の床上50cmの浸水が認められたが、建物に大きな被害は見られず、避難所として9月4日まで機能した。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		2回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	1回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
		その他（ ）	0回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市作成の防災副読本「未来へつなぐ」を活用し、避難訓練の意義や安全な避難の仕方について指導した。
- ・時と場所に合った避難の仕方について考えさせ、校舎内の具体的な場所を挙げながら話し合いをさせた。



副読本を活用した事前指導

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報受信機で地震発生を知らせる。
- ・緊急校内放送により地震の情報を伝える途中で放送機器が使えなくなる。
- ・「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」場所で自分の身を守らせる。
- ・経路の安全確認を行った後、拡声器で各階に自分の教室への二次避難を指示する。
- ・揺れが収まったら防災頭巾を着用させる。
- ・本部の情報収集により大津波警報が発表されたことを受け、3階までの避難経路を確認する。
- ・大津波警報の発表と3階への避難指示が出る。
- ・3階の避難場所に学年ごとに避難する。
- ・人員確認と校長への報告を行う。
- ・放送により避難解除を知らせる。



一次避難の様子



校舎3階への避難の様子

③ 事後指導等

- ・避難訓練の意義、避難場所と避難経路を確認した。
- ・避難行動についての振り返りを行った。
- ・「石巻市防災教育副読本」を活用し、地震、津波の被害について学習した。振り返りを記入させた。



振り返りを副読本に記入

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 緊急地震速報の音源に慣れ、落ち着いて身を守る行動がとれるようになってきた。
- 二次避難の場所を校庭から教室に変更したことで、校庭に移動する際と三次避難で全校児童が一斉に3階へ避難する際のリスクを避けることができた。
- 速報の音源のみに反応し、リードタイムまでは聞き取れていない様子だった。
- 9月の避難訓練（休み時間）の際には、緊急地震速報が校庭に聞こえず、直接知らせることになった。有事の際に反応しない可能性もあることが分かった。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	緊急地震速報のリードタイムを聞かせ、できることを考えさせるようにしていきたい。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	時と場に応じて自分の身を守る行動を取れるようになってきている。情報収集力を高めていきたい。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立鹿又小学校

所在地 石巻市鹿又字矢袋屋敷合 3 1 番地

在籍数 2 7 7 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は石巻市河南地区東部に位置し、北側と東側に旧北上川が流れている。国道 4 5 号線と三陸自動車道が学区の東側を縦断している。東日本大震災では校舎や備品等の一部破損があったものの、津波による被害はなく、避難所として沿岸部から避難してきた人々の受入れを行った。また、震災以降、学区西側と南側を中心に宅地開発が進み、児童数は増加していたが、ここ数年は減少している。



本校では、学校単独の避難訓練を月 1 回程度実施しているほか、鹿又保育所や河南東中学校区（河南東中・須江小・和湊小）の学校と連携して引渡し訓練を実施している。災害に備え、保護者・地域・関係諸機関との一層の連携づくりに取り組んでいる。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		1 0 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		5 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	5 回
		地震・津波	0 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	0 回
	その他（ ）		0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・避難訓練の意義、目当てを周知する。
- ・緊急地震速報が流れたときの対応行動を指導する。
- ・避難の際に防災頭巾をかぶることを指導する。
- ・「お・は・し・も」（おさない、走らない、しゃべ



副読本を活用した事前指導

らない、戻らない)を守って行動することを指導する。

- ・2回目以降は、前回の反省を踏まえて指導する。

② 訓練の取組状況

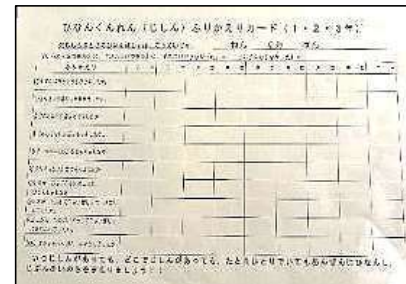
- ・授業時間、休み時間、清掃時間に緊急地震速報を流した。
- ・緊急地震速報の警告音が流れると、児童は動きを止め放送に耳を傾け、すぐに対応行動を取った。
- ・自分の教室にいた児童は、机の下に潜り一次避難した。
- ・教室以外で対応行動を取る際は、その場に合わせた避難行動を取っていた。



縦割り遊び時の避難行動

③ 事後指導等

- ・学校統一の振り返りカードを活用し、各学級で避難の様子について振り返りを行った。
- ・実施した想定以外の避難についても学年に応じ、具体的に考えさせた。
- ・学校外の場所についても、具体的な場面を想起させて、地震が発生した場合の危険回避行動を考えさせた。



学校統一の振り返りカード

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 緊急地震速報が流れると児童・教員ともに迅速かつ安全に、落ち着いて行動することができた。
- 緊急地震速報受信機を活用した訓練時に学校外での避難行動も指導することで、災害時の避難の方法についての理解が深まった。
- 今年度、地震や火災等により校地外に避難する必要がある場合を想定し、隣接する石巻北高等学校の校庭への避難を行った。次年度以降、実際に石巻北高等学校に避難する訓練を行う等、緊急地震速報受信機を活用し、多様な想定の下、本校以外の場所での避難訓練ができるようにしていく。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	迅速・安全に児童を避難させる行動が取れた。様々な状況下で自ら判断できるよう、更に研修を重ねる必要がある。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	落ち着いて行動を取れるようになってきた。更に自分で判断して避難行動が取れるよう、訓練を重ねる必要がある。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立大原小学校

所在地 石巻市大原浜大光寺 1 番地

在籍数 14 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、牡鹿半島の先端部を占める旧牡鹿町の南西部に位置している。学校は、海までの距離が近く、海底が震源となった場合には、津波が襲来するおそれがある。東日本大震災では、学校の西側 10 m まで浸水していることに加え、大雨が降ると、背後の大草山一帯は土砂災害危険区域となることが多いことや、県道石巻鮎川線は強い雨で冠水することが多いことも避難する際の障壁となっている。また、女川原子力発電所からは 7 km の距離にあり、準 P A Z（緊急時防護措置を準備する区域）となっている。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	5 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	1 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	1 回
	地震・津波	2 回
	地震・火災	1 回
	地震・洪水	0 回
	地震・土砂災害	1 回
	地震・原子力災害	0 回
	その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・各教室に「お・し・か・も・ち」の約束を掲示し、「押さない」「しゃべらない」「駆けない」「戻らない」「近づかない」ことを常に確認している。
- ・毎月第 2 火曜日の朝の活動を防災学習の日として、大きな揺れを感じたり、緊急地震速報が聞こえたりした際の避難行動について「未来へつなぐ」の活用を通して指導・確認を行っている。



「お・し・か・も・ち」の掲示

② 訓練の取組状況（6月19日・昼休み）

- ・緊急地震速報受信機で、震度階級、到達秒数を放送した。
- ・児童は、放送を聞くと、到達秒数までの時間を考慮し、直ちにそれぞれの場所に応じた適切な避難行動をとった。
- ・二次避難の指示に従い、速やかに校庭に避難することができた。さらに、担任は、児童の整列後直ちに異常の有無を確認し、教頭に報告を行った。



避難訓練の様子（二次避難後）

③ 事後指導

- ・二次避難場所の校庭で、全体会を行った。地震はいつ来るか予想できず、授業中や家族という時以外でも起こり得る。揺れを感じたり、緊急地震速報の放送が流れたりして、避難する必要がある場合に、「自分で考え自分の身の安全を守る」ため、迅速に行動することが大切であり、そのために、今後の訓練にも真剣に参加する必要があることを指導した。
- ・学級ごとに教室で一次避難、二次避難、さらに、災害規模によっては三次避難、四次避難までの避難の仕方について指導し、話し合いを行った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報の放送を聞き取ると、大きな揺れの発生までの秒数を確認し、児童一人一人が、自分がいる場所に応じて適切な避難行動をとることができた。
- その場で一次避難から校庭への二次避難に移行する放送後、児童は、教職員の指示をしっかりと聞き、迅速かつ安全に校庭へ避難することができていた。
- 災害発生時、教職員に不在者がいた場合でも児童を安全に避難させることができるよう、役割分担や避難時の流れについて全職員で共通理解を図る必要がある。
- 緊急地震速報受信機を活用した避難訓練を想定を変えるなどして複数回行うなど、多様な災害への対応策を検討していく必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	大きな揺れ発生までの時間で、どんな行動をとるべきか考えさせる必要性を職員間で共有し、学年に応じて指導している。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	緊急地震速報に耳を傾け、大きな揺れが起きるまでの時間でどのような避難行動ができるかを考え実践できた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立万石浦中学校

所在地 石巻市流留字七勺2 1 番地

在籍数 1 4 0 人

1 学校の概要（学校防災面）

本学区は、万石浦に面している地区と太平洋に面している地区に分かれており、東日本大震災では、太平洋に面している地区では大きな被害を受けた。津波の被害を受けなかった地区でも、震災後しばらくの間、冠水の被害を受けている。校舎には津波の被害がなかったため、震災直後は避難所として、約1,000名の避難者が生活していた。学校再開後は10月まで体育館が避難所となった。



このような経験を踏まえ、今年度も石巻市総合防災訓練の際に、地域防災連絡会と連携し、生徒と地域住民合同の避難所開設訓練を行った。

2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	0回
		地震・津波	3回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
	その他（ ）		0回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・操作等に係る校内研修 ・自身の規模や震源地等に関する情報収集	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市教育委員会作成の防災読本「未来へつなぐ」を使い、避難訓練の意義や避難の方法について学級ごとに指導している。
- ・震度5以上の地震発生の際に緊急地震速報が放送されることや、その場合の校舎内外の退避行動について学級担任が指導した。



副読本を活用した事前指導

② 訓練の取組状況

- ・年度当初の計画通り、授業中、休憩時間中、部活動中、停電時、管理職不在時、予告なしなど、様々な場面や条件を想定して計3回訓練を実施した。
- ・訓練の想定に応じて二次避難先や避難経路などを変えたが、生徒も職員も臨機応変に対応することができていた。



教室での一次避難

③ 事後指導

- ・「落ちてこない」「倒れてこない」場所など、事前指導で確認したことを踏まえて、教室以外の教室、校外、自宅にいる場合など、あらゆる場面を想定して、自らの命を守る方法等について考える場面を設けた。
- ・タブレットを活用して振り返りを行い、地震災害に対する備えや避難の様子を確認しながら、避難訓練の反省や自己評価を行った。
- ・緊急地震速報の警報音が鳴った際の行動について、いろいろな場面を想定しながら、各学級で考えを共有した。



タブレットでの振り返り

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報に対し、素早く反応し、冷静に対応することができていた。
- 訓練の場面や条件ごとに避難先や避難経路を変更したが、生徒は混乱することなく、落ち着いた態度で二次避難を行うことができた。
- 予告なしの訓練に対しても、生徒も職員も臨機応変に対応する姿が見られた。
- 職員数が以前より減ってきているため、避難経路の安全確認や生徒の誘導等のやり方の修正が必要である。どのような状況においても全員が安全に避難できるよう、訓練のやり方を工夫していきたい。
- 生徒が東日本大震災を経験していない世代であることを踏まえ、震災当時の様子について伝える機会を設け、生徒の防災意識を更に高めていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	訓練のポイントを押さえ、生徒を安全に素早く避難させることができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	地震発生時に何に気を付けなければならないかを考えながら、真剣に避難訓練に参加している。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立飯野川中学校

所在地 石巻市相野谷字旧会所前 3 4 番地

在籍数 77人

1 学校の概要（学校防災面）

校地は、平地にあり、標高は約 1.8m である。校舎北側は崖になっている。近年、土砂災害は発生していないが、大雨と地震が重なった場合は、警戒が必要である。学校及び学区の大部分は低地にある。学区の北側には山地があり、学区の南部は北上川（追波川）が流れている。



東日本大震災では、学区の一部で地震による地割れ、土地の隆起があった。また、川を遡上する津波の影響で学校周辺の住宅で床下浸水したところもあった。学校は、地震の影響で校舎の一部に亀裂が入ったところもあったが、建物に大きな被害はなかった。大震災当日から 8 月上旬まで避難所となり、最大で 400 名が避難した。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		4 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	1 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
	その他（ ）		0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		・ 操作等に係る校内研修 ・ 地震の規模や震源地等に関する情報収集

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・ 防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用して防災への理解を図った。
- ・ 特別教室や廊下等の状況を踏まえながら、災害等が起きた際の避難経路などについて意見を出し合い、考えさせた。



3 次避難で移動している様子

② 訓練の取組状況

- ・訓練当日は、緊急地震速報受信機を活用し、速やかな避難行動をとることができた。
- ・地震により通行不可の場所の設定や停電、火災発生等、様々な想定を組み込んだ。トランシーバーや拡声器を活用して連携し、速やかに避難することができた。



体育館へ避難している様子

③ 事後指導等

- ・安全確認後、全体講評を行った。
- ・防災教育副読本に振り返りを記入し、学級内で発表し合い、共有を図った。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- アクションカードを活用したことで、どの教員が本部の担当をしても速やかに実施することができた。
- 事前、事後の指導において、防災教育副読本を活用させたことで、訓練の必要性や行動の仕方を理解し、速やかに行動することができた。
- 緊急地震速報受信機を活用したり、様々な避難経路を想定したりと、より実践に近い訓練となり、緊張感を持って実施することができた。
- 生徒の搜索担当の教員は、声を出しながら搜索することを徹底していきたい。
- より実際の災害に近い想定で行えるように、生徒へ事前に想定の詳細は伝えなかったり、訓練を実施する時間帯を変えてみたりすることを検討していきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	より実践に近い避難行動、生徒への指示等を訓練することができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	教師の指示がある前に、生徒が速報の音声を聞いて速やかに頭部を守る等の避難行動ができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立湊小学校

所在地 石巻市吉野町一丁目3番21号

在籍数 150人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は石巻市東南に位置しており、旧北上川が太平洋に注ぐ河口の東岸一体に広がっている。北東には牧山（標高218m）を中心とする山稜が連なり、平地は山稜の南側に東西に広がり、校舎は学区内平地の西側、海拔3mに位置している。



2011年の東日本大震災の大津波で湊地区一帯は壊滅的な被害を受けた。本校も校舎1階天井まで浸水した。津波被害により、学校管理下外で児童4名が亡くなっている。当日から避難所となり、多くの方が避難生活をしていた。（最大避難者数：約1,400名）

学区にある多くの家庭は、家屋や職場、親族や知人が被災した経験をもつ。学区内に災害公営住宅があり、そこから通学している児童も多い。

2 令和7年度避難訓練実施計画

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート避難訓練等も含む）	14回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	4回
※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	2回
	地震・津波	2回
	地震・火災	0回
	地震・洪水	0回
	地震・土砂災害	0回
	地震・原子力災害	0回
	その他（ ）	0回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 地震津波想定訓練（屋上・高台避難訓練）

- ・実施日：4月22日（火）2校時
- ・概要：緊急地震速報受信機を使用し、震度6強の地震が発生したことを知らせた。各教室で一次避難後、大津波警報が発



速やかに廊下に整列する2年生

表され、屋上に避難した。しかし、校舎火災が発生したため屋上から古館山に避難することにした。

② 地震津波想定避難訓練（余震、負傷者あり）

- ・実施日：6月25日（水）2校時
- ・概要：震度6強の地震が発生し、各教室で1次避難をした（緊急地震速報受信機使用）。また、教室から屋上へ避難する途中で余震が発生し（緊急地震速報受信機使用）、避難の途中で負傷者が出るという救出活動も取り入れた訓練を行った。

③ 地震想定避難訓練（学習参観日に実施）

- ・実施日：12月5日（金）下校準備中
- ・概要：5校時終了後、下校の準備をしている際に震度6強の地震が発生し、各教室で一次避難を行った（緊急地震速報受信機使用）。その避難の様子を保護者の方に見ていただいた。

④ 地震想定避難訓練（非告知、管理職不在）

- ・実施予定日：2月17日（火）発災時刻は未定（令和6年度は午前8時）
- ・概要：管理職不在という想定のみ職員に伝え、発災時刻は非告知で行う予定である。発災の知らせは緊急地震速報受信機を使用する。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○緊急地震速報受信機の訓練機能を使用し、実際の地震発生時に流れる警報音を使った緊張感のある避難訓練を実施することができた。

○児童は緊急地震速報受信機や教師の指示を聞いて、迅速に避難することができるようになった。

●12月の訓練において保護者は参観のみだったが、保護者来校時の発災も考えられる。保護者来校時を想定し、緊急地震速報受信機を活用した避難訓練を実施したい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	地震発生までの数秒間に児童の命を守るために何ができるかを様々な想定下の訓練で考えることができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	校舎内において緊急地震速報受信機は、命を守る貴重な情報源であることを知り、しっかりと聞いて避難する様子が見られた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立渡波小学校

所在地 石巻市渡波町一丁目5番22号

在籍数 311人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、石巻市の東端、万石浦に臨む牡鹿半島の基部に位置している。東日本大震災では、国道398号線から南側の地区で甚大な被害を受けた。また、津波により校舎1階が浸水した。この影響により、平成23年度は、貞山小と山下中に間借りしての校舎で授業を再開。同年2学期から稲井中敷地内での仮設校舎での生活を経て、平成26年4月から本校舎にて学校再開を果たすことができた。



今年度は、緊急地震速報受信機活用訓練を年間4回実施する計画とした。また、授業時間以外の避難訓練や訓練予告なしの避難訓練を設定した。

2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		4回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	3回
		地震・津波	1回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
	その他（ ）		0回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・使用方法についての校内職員研修 ・震度や震源地等に関する情報収集	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・地鳴り（初期微動）や緊急地震速報が聞こえたら、「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」場所に落ち着いて速やかに避難することを指導する。また、防災教育副読本を活用する。
- ・教室にいるときだけでなく、廊下や階段、特別教室、講堂、校庭など、校地内各所での避難の仕方について指導する。

- ・放送や教師の指示をしっかりと聞くことを指導する。

② 訓練の取組状況

- ・休み時間や清掃時間中の地震発生想定避難訓練において緊急地震速報受信機を活用した。児童は速報音が鳴ると、速やかに机の下などで頭部を守り身の安全を確保する行動ができていた。
- ・授業中の地震・津波発生を想定し、今年度は屋内の階段から屋上への避難を行った。教師の指示を聞いて、「おはしも」の約束を守って素早く避難行動をすることができた。
- ・全学級にトランシーバーを配布し、素早い情報伝達や情報共有を行った。



休み時間中の避難訓練

③ 事後指導

- ・緊急地震速報音が鳴った際に「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」場所で速やかに自分の身を守ることができたか確認した。
- ・防災教育副読本を活用しながら自己の避難行動について振り返らせたり、自他の命を守るための訓練に真剣に取り組む大切さを再確認したりして防災意識を高めた。
- ・地震後には津波のリスクがあることや命を守る行動について考えさせた。



屋上への避難訓練

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 昨年度の反省を踏まえ、本受信機を使った避難訓練の内容を充実させて児童の防災意識や避難行動のスキルを高めることができた。
- 「防災学習の日」を設定し、その中で避難訓練の事前指導を行えるようにした。また、防災教育副読本を活用し、各学年の実態に応じた指導をすることができた。事後指導でも防災教育副読本を活用し、振り返りを行うことができた。
- トランシーバーを効果的に活用した避難訓練が実施できた。
- 今後も緊急地震速報受信機を活用した避難訓練を繰り返すことで、児童の避難行動のスキルを高めていく。また、余震を想定した訓練の実施など、様々な想定での避難訓練を計画・実施する。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	緊急地震速報音や地震発生時などにはすぐにトランシーバーで情報共有できる体制ができている。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	自主的な避難行動を行う児童が多いが、自分事としてより真剣に取り組めるよう指導を重ねていく。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立万石浦小学校

所在地 石巻市渡波字境釜 1 番地 1

在籍数 2 1 5 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、渡波地区の東部に位置し、旧万石浦小学校の 1 0 地区（サンファン（小竹、佐須、祝田、月浦、侍浜）、万石町、塩富町（一・二丁目）、宇田川・後生橋、うしお町、垂水町、流留、表沢田、万石浦一区、万石浦二区）と旧東浜小学校の 4 地区（牧浜、狐崎浜、鹿立浜、福貴浦）の計 1 4 地区となっている。通学は徒歩又は保護者の自家用車による送迎であるが、祝田地区と荻浜等の一部児童は、通学時の安全を確保する市の事業により、タクシーで通学している。



2 0 1 1 年東日本震災では、沿岸部にあるにもかかわらず、本校舎は津波の直接的被害を受けなかったが、校舎内外の壁や床に地震によるひび割れなどが見られた。体育館は床が落ち、使用できなくなった。学区内の大部分は、地震による建物の倒壊などの大きな被害はあまり見られなかったが、湾に面した一部の地区で浸水が見られた。当時の在校生のうち、保護者に引き渡した後、避難する途中で 2 名の児童が津波により亡くなっている。

近年の状況及び石巻市ハザードマップ等から次の点に注意している。

- ①震災により 1 m 程度地盤沈下したため、大雨や津波による浸水や冠水箇所が拡大した。
- ②令和 5 年 8 月に改訂された津波浸水想定により、本校校庭も最大で 8 2 cm の浸水が想定されることになった。
- ③表沢田、塩富町、祝田地区は、大雨が降ると冠水する箇所が多い。
- ④学区内に土砂災害警戒区域があり、大雨が降ると危険性が高まる。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	7 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	1 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	0 回
	地震・津波	1 回
	地震・火災	0 回
	地震・洪水	0 回
	地震・土砂災害	0 回
	地震・原子力災害	0 回
	その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・休憩時に地震が起きた場合の行動について話し合わせる。
- ・一次避難行動の取り方について指導する。
- ・どの休憩時に地震が起きるか分からないことを知らせる。
- ・学校や家庭で地震にあった際の対応の仕方や避難場所の確認をする。
- ・避難の際は「おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない」の「お・は・し・も」を守るよう指導する。



防災頭巾の被り方の事前確認

② 訓練の取組状況

- ・地震発生時の通報を放送静かに聞く。
- ・避難指示を聞いてから机の下に避難して安全確保する。(一次避難)
- ・職員は、避難経路の安全確認をしてトランシーバーで連絡する。
- ・放送の指示を聞き、屋上に二次避難する。廊下や階段では、「おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない」の約束を守る。



机の下へ避難し安全確保

③ 事後指導等

- ・各クラスで訓練を振り返る。
- ・日常生活で、地震に備えた準備物や心構えについて確かめる。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 児童は、緊急地震速報に驚くことなく冷静に避難行動をとっていた。
- 児童を放送や教師の指示をよく聞き、安全に屋上に避難することができた。
- 今回は、屋上への避難となったが、3階教室や体育館への避難の訓練も検討する。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	第一次避難、第二次避難の際、児童への指示が的確にできた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	放送や指示をしっかりと聞き、第一次避難、第二次避難が落ち着いて速やかにできた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立大谷地小学校

所在地 石巻市小船越字角田 1 6 番地 2

在籍数 1 0 6 人

1 学校の概要（学校防災面）

本校は後背湿地を盛土して建設され、周辺には水田や畑が広がる耕作地帯が広がっている。児童の自宅と校舎の距離が離れているため、保護者による送迎又は地区ごとの自転車通学となっている。東日本大震災では、校舎及び学区に大きな被害はなく、被災した住宅も数件にとどまった。校舎周囲に崖等もないため、土砂災害の危険も少ない。



ただし、ハザードマップの津波・洪水想定では、校舎及び学区が 3～5 m の浸水域に位置づけられている。このため、2 階建ての本校校舎では、垂直避難によっても浸水を防ぐことはできない。そこで、北上川の氾濫や堤防決壊のおそれがある場合は、3 次避難場所である「沢田山」へ避難することになっている。しかし、移動距離や時間を考慮すると、その判断は容易ではない。

本校では、訓練実施の際に、行政委員さんにも協力・助言をいただきながら避難行動の在り方について協議している。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1 回
		地震・津波	0 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	1 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
	その他（ ）		0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・学級ごとに業前における防災タイムで、地震や避難行動について確認を行った。児童

に「報知音が聞こえたら地震が起きる」ということを認識させ、速やかに退避行動ができるように繰り返し指導している。

- ・避難が必要となった場合の場面(場所、時間、季節等)に応じた持ち物、服装等児童の発達段階に応じて指導を行った。
- ・防災副読本を活用し、地震が発生した場合の安全な避難の仕方について指導した。児童に「お・は・し・も」の約束で安全な退避行動を意識させた。

② 訓練の取組状況

- ・今年度は計3回の避難訓練において、緊急地震速報を活用し、訓練を行った。児童は報知音が聞こえると、速やかに机の下に潜り、静かにその後の指示を待つことができていた。
- ・沢田山への避難訓練では、緊急地震速報後、誘導の指示に従い、校庭への二次避難、さらに近隣の高台である沢田山への三次避難を実施した。上下級生のペアを組み、互いの安全に気を配りながら沢田山を登る姿が見られた。



上下級生ペアによる高台避難

- ・三次避難場所である沢田山老人憩の家では、各地区の行政区長さん方にもお越しいただいた。同じ地区ごとに集合し、挨拶を交わした。顔と顔が見えることで、石巻市総合防災訓練の連携にもつなげることができた。



行政区長さん方とのあいさつ

③ 事後指導

- ・訓練当日の避難行動等の振り返りを行った。学校で大きな地震が起きた場合だけでなく、学校以外の場所で地震が起きた場合は、地震に関する警報音が複数あることを確認し、その場に応じて、自ら考えて退避行動するよう指導を行った。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

○緊急地震速報を聞いた際の「まず低く、頭を守り、動かない」といった一次避難行動が、児童の間で定着している。

●停電を想定して放送設備を使わない訓練や、負傷した児童役を設定するなど、より臨機応変な対応を検証する訓練も検討していく。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	全職員もヘルメット着用したり、安全を最優先した指示を意識したりすることで児童に本気で訓練に取り組む姿勢を示している。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	異学年ペアでの活動や地域の方との交流を通して安全に対する意識の共有を図ることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立和湊小学校

所在地 石巻市和湊字佐沼川 2 0 0 番地

在籍数 4 5 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、南北に約 5 k m、東西に約 4 k m。学校から最も遠い地区の児童は自転車で約 4 0 分かけて登校している。

校舎は平成 1 8 年完成で、耐震構造であり倒壊等の危険性は低い。体育館は昭和 4 9 年完成で、床の傾き、一部窓の開閉不可、照明器具等の落下の危険性がある。校地の東側約 1 0 0 m に北上川が流れており、洪水の危険性がある。西側には田畑が広がっており、地盤が頑強でなく、地震時には地割れや地盤沈下の危険性がある。

東日本大震災時は、学区内に倒壊等の事故は起きなかったが、全・半壊多数、マンホールの隆起や道路の陥没が数箇所あった。また、北上川は津波が遡上し、約 1 5 0 c m 水面が上昇した。校舎内外に大きな被害はなかった。体育館には数日間地域住民が避難していた。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	1 1 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	3 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	3 回
	地震・津波	0 回
	地震・火災	0 回
	地震・洪水	0 回
	地震・土砂災害	0 回
	地震・原子力災害	0 回
	その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要 5 月 9 日（金）

学校生活中に石巻市内で震度 6 を観測する地震が発生し、児童を保護者へ引き渡す必要が生じる。



校庭に二次避難をしている様子

① 事前指導等

- ・児童に対し、地震が発生したらどのように対処するか様々な想定を考えて指導した。
- ・職員は、事前にシミュレーションを行い、避難誘導の動きや避難経路、引渡しの手順を確認した。
- ・1年生は、初めての避難訓練だったので、避難経路を事前に歩いて確認した。



二次避難が完了し、校長先生の話をしている様子

② 訓練の取組状況

- ・児童は、落ち着いて一次避難、二次避難ができた。
- ・「お・は・し・も」の約束を守り、安全に避難することができた。
- ・集合場所では静かに待つことができた。

③ 事後指導

- ・各自がどのような避難行動をしたか振り返った。また、避難の指示をしっかりと聞くことができていたことを確認した。
- ・職員は、各自の避難行動や指示、誘導が適切であったか振り返り、後日の会議において共通理解を図った。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 緊急地震速報の音が鳴った時点で、放送による指示をよく聞こうとする態度が養われているため、緊張感をもって訓練に取り組むことができた。
- 保育所や地域の方（「和っ子」見守り隊）と連携して訓練をすることができた。
- 引き渡しの際、校庭や学校周辺の交通整理に課題がある。通行方法などの周知徹底を図りたい。
- 緊急地震速報の特性（地震発生までの猶予時間）を活かし、児童一人一人が安全な場所を確保してから一次避難ができるよう、徹底を図っていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	職員によるシミュレーションを行うことで、当日は的確な指示を与えることができ、避難経路の判断もスムーズに行うことができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	防災タイムを計画的に実施し、様々な訓練の意義について考えさせてきた。実施時刻については予告なしで取り組むことが多かったが、児童は慌てることなく速報や放送を聞き、落ち着いて行動することができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立湊中学校

所在地 石巻市湊東一丁目 1 3 番地 1

在籍数 5 8 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、旧北上川の東側に位置し、西は日和大橋、石巻かわみなと大橋、新内海橋、石巻大橋によって市街地と結ばれ、東は渡波地区に隣接し、南は太平洋、北には避難場所となる牧山につながる大門崎公園がある。

東日本大震災では、6 mを超える大津波で校舎 1 階天井まで浸水被害が及んだ。そのため、石巻中学校での間借り生活を経て平成 2 6 年 3 月まで中里小学校内仮設校舎で過ごし、同年 3 月 1 5 日に本校舎へ戻ることができた。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		5 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		5 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	3 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
	その他（ ）		0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

防災タイムを活用し、地震と津波をテーマとした学習を行い、下記の点について確認・指導した。

- ・校舎内の避難経路及び二次避難先への避難経路。
- ・訓練に臨む態度について。
- ・防災教育副読本を活用して、地震や津波の仕組みや避難の仕方。



休み時間時ショート訓練

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報受信機の音源を使用。
- ・地震・津波想定での三次避難訓練では、どの学年の生徒も真剣に臨み、素早く避難行動をとることができた。
- ・教職員はトランシーバーを用いて情報共有や連絡等を行った。



地震・津波想定避難訓練

③ 事後指導

- ・訓練後に Google フォームを用いて教職員と生徒を対象としたアンケートを実施し、訓練への取組について振り返った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 事前指導において市の防災教育副読本を活用し、在校時に教室以外の場所で地震等が発生した場合の避難行動について考えさせることができた。
- 地震・津波想定避難訓練などの各種訓練を実施したことで、避難の仕方や身の守り方を改めて確認することができた。
- トランシーバーを活用して教職員間の連絡や情報共有を図ったことで、校舎内検索や避難経路の安全確認等の時間を短縮することができ、素早い避難行動につなげることができた。
- 訓練を通じて、避難行動の仕方や身の守り方の確認だけではなく、振り返りを通じて出てきた意見を、学校防災体制の見直しに生かすことができた。
- 緊急地震速報の音源が苦手な生徒がいるので、事前に知らせておくことや、訓練後に体調確認を行うことを忘れないようにしたい。
- 避難訓練がマンネリ化しないよう、訓練の質を高めていく必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	実際の緊急地震速報の音源を活用したことで、訓練に緊張感が生まれたため。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	実際の緊急地震速報の音源を活用したことで、訓練に緊張感が生まれたため。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立青葉中学校

所在地 石巻市門脇字一番谷地51番地10

在籍数 192人

1 学校の概要（学校防災面）

本校は、石巻市の西部、東松島市と境界を接する地域に位置し、学区は上釜、下釜、上大街道1・2の4地区である。地域が国道45号線及び398号線沿いにあるため、近年振興商業地域として著しく都市化が進み、他地区からの移住者も多い。東日本大震災により、北上運河を境に海側の上釜、下釜地区が特に大きな被害を受けたが、現在は着々と復興と生活再建に向けた取組が進んでいる状況である。地域の避難所に指定されており、市総合防災訓練では、地域と合同の避難訓練を実施している。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		8回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		2回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	0回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・4月には各クラスで、一次避難の基本姿勢について指導を行い、地震が起きた時の心構えを持たせた上で訓練に臨ませた。事前指導には、防災教育読本の「学校にいるときに地震が起きたら」の内容も活用した。職員には、緊急地震速報受信機の特徴や使い方について



事前指導の様子

8月の職員会議で説明し、9月には放課後に緊急地震速報が流れた際の避難行動について、各部の部長を通じて生徒にも心構えを持たせた。

② 訓練の取組状況

- ・9月の訓練は、放課後の部活動中に地震が起きたという想定で行った。3年生は修学旅行で不在、それを引率した教員も不在であり、顧問がつけない部活動もあった。そのような中、部長が率先して指示を出して避難行動をとる場面も見受けられた。

③ 事後指導等

- ・緊急地震速報時の避難行動については、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所や状態を最優先するなど、事前指導で学習したことについて確認し、その後、タブレットを活用して、Google フォームで各自の振り返りを行った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○受信機は様々な設定ですぐ訓練ができるため、時間と場所を予告しないショート訓練での活用に効果的であった。今後も予告なしでこのような訓練を行うことの重要性を感じた。

○緊急地震速報受信機の動作確認ができた。

●受信機の発災時間（リードタイム）の設定について、これまであまり注意を払わずに準備をしていた。すぐ発災する場合と、時間をおいて発災する場合など様々な状況を想定した訓練を工夫していきたい。

●受信機の音は、かなりの音量で外にも広がる。本校のすぐそばには民家や保育所、介護施設等があるので、外部への音漏れに配慮が必要となる。過去に近くの保育所を驚かせてしまった経緯から、今年度は事前に連絡をした上で実施した。今後も事前連絡の必要性を感じている。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	受信機の概要については周知できたが、実際の操作はまだ防災主任のみに限定される。操作できるまでの研修を計画したい。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	生徒のリーダーを中心として、教員に頼らずに自分たちで自分たちの命を守ろうとする意識を高めることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立寄磯小学校

所在地 石巻市寄磯浜五梅沢 2 4 番地

在籍数 4 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、牡鹿半島の東に突き出た寄磯半島にあり、寄磯・前網の2地区からなる。東日本大震災により多くの家屋が流出し、地区は大きな被害を受けた。その後、浜と漁業の再建に励んでいる。ホヤやホタテなどの養殖は以前のように回復してきているが、高齢化と若者の流出により、人口減少が続いている。

本校は、高い土地にあり、地域の避難所となっている。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		1 0 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		7 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	5 回
		地震・津波	0 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	0 回
		その他（地震・津波・原子力）	2 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・業前の防災の時間を活用し、地震発生時の避難行動について確認する。
- ・大きな地震が発生した際の二次災害（原子力災害や津波発生）について学ぶ。



防災の時間に災害について学ぶ

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報の音を聞き、机の下に一次避難をする。
- ・ヘルメットを被り、校庭に二次避難をする。
- ・女川原子力発電所の事故報告を受け、引渡しの準備を行う。



教室で一次避難を行う

③ 事後指導等

- ・全校で、避難訓練の振り返りを行った。
- ・職員で避難の仕方についての振り返りを行い、訓練時に不在だった職員と共有を図った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○引渡し訓練まで行ったため、保護者とも災害時の行動について確認することができた。本校は、PAZ区域内にあるため、原子力災害発生時の対応について、改めて職員間で確認することができた。

○緊急地震速報を活用したシェイクアウト訓練を、場所を変えて行ったことで、児童がどのような場所においても、安全な一次避難の仕方を自ら考えて、行動するという意識を持たせることができた。

●本校では、教職員数が少ないことや、常勤でない職員が多いため、日によって災害時の職員の役割が異なる。どのような場所、どのような時間帯でも児童の身を守れるように、児童の防災意識の向上だけでなく、職員研修、会議等の場を使って職員の防災意識を高めていく必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	日頃から緊急地震速報に対応する意識を持つことができたようになった。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	緊急地震速報を聞き、素早く行動することができるようになった。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立石巻中学校

所在地 石巻市泉町四丁目7番15号

在籍数 320人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、旧北上川の河口の北西に位置し、学区の半分以上は海岸線に近い低地である。学区の南側が海岸方面、東側が北上川河口部、北側と西側が商業地と繁華街になっている。



校地は、日和山丘陵地帯の頂上付近にあり、市街地全体の避難所としても機能している。

東日本大震災時には、震度6弱の地震により校舎に亀裂が入ったが、校地内への津波の被害はなかった。学区内は日和山以外の地域で浸水の被害があった。また、大雨の際は、学区東側の北上川河口部の地域で川の氾濫のおそれがあり、学区西側の石巻駅周辺の低地では、内水氾濫による浸水が心配される。2021年度より隣接する門脇中学校と統合し、大街道小学校区が学区内となった。

「地域防災連絡会」は石巻小学校区及び山下小学校区、大街道小学校区でそれぞれ行っており、そのいずれにも出席し、地域との連携を行っている。また、本校を避難所としている泉町町内会と双葉町町内会、学校運営協議会防災教育部のメンバー、石巻市役所の石巻中学校担当職員で、「石巻中学校避難所開設協議会」を設立し、避難所の開設や石巻市総合防災訓練の参加について連携を図っている。

2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		5回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	4回
		地震・津波	0回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

・防災副読本を用いて、緊急地震速報の音が鳴ってからどのような避難行動をとることができるか指導した。また、教室や廊下、特別教室など、校内における危険箇所について生徒に考えさせて、避難行動をとる際には、その箇所から離れて身を守ることを話した。



説明用画像（石巻市防災教育副読本より）

② 訓練の取組状況

・清掃時間や昼休み、部活動時間中のシェイクアウト訓練を1年間で4回実施した。清掃時間や昼休みの訓練については、生徒への事前の告知を行わずに実施した。

・原子力災害を想定した訓練は、緊急地震速報の音に合わせてその場で避難行動をとり、その後屋内退避を行う想定で実施した。

③ 事後指導等

・避難訓練やシェイクアウト訓練を実施した後に、生徒用の iPad から Google フォームを用いて振り返りを行い、自分自身の避難行動や、実際に災害が発生したときに、どのような行動をとればよいかを自分の言葉でまとめさせた。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 今年度のシェイクアウト訓練で、清掃時間や昼休みの訓練を事前予告なしで行ったことで、生徒は「突然でびっくりしたけれど、落ち着いて行動ができた」「焦ってしまい適切な避難行動がとれなかった」などと振り返っており、より実際の場面に即した訓練として、今後の自分の避難行動を見直すきっかけとすることができた。
- 緊急地震速報受信機の使用は、当日思ったように音が流れなかったこともあったので、事前に動かし方を確認したり、地域住民への周知を図ったりして、適切な活用ができるようにしていきたい。また、災害発生時の生徒へ指導だけでなく、職員がどのように動けばよいかを考え、避難訓練を通して動きを確認できるようにしたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	職員が自ら判断し、生徒の安全を確保し確認する姿が見られた。今後は、災害発生時に本部からどのような指示を出し、職員がどのように行動するかを細かく想定したい。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	実際の災害が起きたと考えると避難行動をとることで、普段の防災学習の成果を発揮するとともに、自分の避難行動を振り返ってより良くしようとする姿が見られた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立北上小学校

所在地 石巻市北上町十三浜字小田 9 3 番地 4

在籍数 5 8 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、旧北上町全域である。北上川と追波湾に沿って東西に細長く広がっており、北上川沿いに県道 1 9 7 号線、国道 3 9 8 号線が通っている。

校舎の北側には、にっこりサンパークがあり、北上中学校と本校の 3 箇所は石巻市の指定避難所である。また、北上地区内には全 1 3 か所の指定避難所・指定緊急避難場所がある。令和 5 年 8 月に石巻市が公表した津波ハザードマップでは、8 か所の施設の安全が確認された。

本校の徒歩圏内には、北上こども園、北上総合支所、河北消防署北上出張所、河北警察署北上駐在所が存在し、学校周辺が北上地区の防災における中心的な拠点である。地域防災連絡会を年 2 回開催し、緊密な連携を図ることができている。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		8 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		4 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	2 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	1 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	0 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市防災教育副読本の活用
- ・緊急地震速報の内容の確認
- ・報知音が流れた場合の対応行動

「安全な場所（落ちてこない、倒れてこない、移動してこない）に素早く避難」「頭を守り、身を低くする」

- ・校庭にいる場合は、校舎、遊具から離れ、身を守る。



校庭への二次避難

② 訓練の取組状況

・ねらい

4月10日、年度始めの避難訓練である。教職員、児童が決められた避難経路を通り、第二次避難場所（校庭）と第三次避難訓練（にっこりサンパーク）の場所の確認と実際に避難する訓練であった。

・想定

第2校時（9時25分）に宮城県沖を震源とする震度6弱、M9.0（東日本大震災と同程度）の地震が発生する。教室内で一次避難をする。その後、余震が続くため校庭に二次避難をする。二次避難後、津波警報が発表され、にっこりサンパークに三次避難をする。

・受信機の設定

本校では、「震度：6弱」、「到達秒数：1分」、「地震疑似音：する」、「津波訓練：する」としている。

・訓練の様子

発報音直後に、児童は机の下に身を隠した。児童は、「落ちてこない」「倒れてこない」「物が移動してこない」場所を見付け、一次避難ができた。その後、「おはしも」の約束を守りながら、校庭への二次避難を整然と行うことができた。



にっこりサンパークへ三次避難

二次避難後、津波警報が発表されたことから、より高いにっこりサンパークへ三次避難を行った。

③ 事後指導等

- ・訓練後に、学年の実態に応じて、「放送や教師の指示に耳を傾け、避難行動をとることができたか」を振り返らせた。その際は、防災副読本も活用した。また、訓練中の児童の様子や教職員の動きについて訓練に参加した教職員で振り返り、課題や疑問について確認を行った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報受信機を活用した訓練を年間で継続して行うことで、「自分の命は自分で守る」という意識を高めることができた。
- 緊急地震速報受信機が作動し発報音が鳴る実際の地震でも、児童は素早く身を守る意識が身に付いてきた。
- 緊急地震速報受信機の「到達秒数」などの設定を変えて訓練を行い、児童・教職員が地震発生の際に瞬時に対応する力を更に高めていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	受信機の活用により、より効果的な指導を行うことができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	受信機の活用により、訓練以外で速報音が鳴った場合でも、命を守る行動を主体的にとることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立牡鹿中学校

所在地 石巻市鮎川浜鬼形山 1 番地 2 4

在籍数 1 4 人

1 学校の概要（学校防災面）

校地は半島部の海拔 3 7 m の地点にある。東日本大震災における津波の被害や土砂災害はなかった。

しかし、学区の大部分は津波で浸水して地域住民には多大な被害があった。通学バスルートや徒歩通学者は浸水地域を通らなければならない状況にある。

なお、本校は牡鹿地区の避難所の一つに指定されている。

令和 4 年度より大阪教育大学学校安全推進セ

ンターに S P S（セーフティプロモーションスクール）として認証（災害安全領域）され、今年度は再認証（生活安全領域）の予定である。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		7 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	3 回
		地震・津波	2 回
		地震・火災	1 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・学級担任より「未来へつなぐ」（市防災教育副読本）を活用しながら、正しい情報に基づいて主体的に避難する方法等を事前指導することで、生徒の主体的な一次避難を行うことができている。



副読本を活用した事前指導

② 訓練の取組状況

- ・訓練時は、常に緊急地震速報の放送を行った。
- ・一次避難：シェイクアウト訓練を実施した。日頃から、生徒は地震が発生すると教師からの指示を待たずに机の下に身を隠す行動をとっている。
- ・二次避難：校庭へ避難させ、安否確認や点呼を取ることで迅速に行った。
- ・三次避難：別日の小中合同引渡し訓練の際に防災主任から避難の際の避難場所や移動する際の留意点について事前指導をし、その後三次避難場所（清優館）に避難させた。



主体的な一次避難の様子



安全に移動する二次避難の様子

③ 事後指導

- ・一次避難から二次避難、三次避難までの振り返りを行わせた。
- ・迅速に避難行動がとれたことと、災害の状況に応じて適切に避難行動がとれるような主体的な判断力を身に付けることができた。



三次避難場所での引渡しの様子

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 今年度の小中合同引渡し訓練の計画に原子力災害対応の避難行動を加えた流れ等に加え、さらに避難計画内容を地域の実態に応じたものにしたことがとても良かった。
- 全教職員と生徒が事前に共通避難行動（シェイクアウト訓練、三次避難までの避難場所や経路等）を確認していたことが、生徒の避難誘導・人員確認、保護者引渡しまでの動きが確実にできたことにつながった。
- 今年度の小中合同引渡し訓練の計画に原子力災害対応の避難行動等を組み入れ、牡鹿総合支所地域振興課・市民福祉課と連携を図った避難計画内容にすることで、地域の災害特性に応じたものにしていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	災害想定に応じて生徒の避難の方法や、経路等を把握した上で指導し、生徒の避難行動力の向上に努めている。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	主体的に避難行動し、更に避難所設営に関しての知識を身に付けている。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立雄勝小・中学校

所在地 石巻市雄勝町大浜字小滝浜 2 番地 2

在籍数 小 1 9 人 中 1 1 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、旧雄勝町内全域である。平成 2 9 年度に月より現在の場所に新築移転した。県道沿いに面し、南側に海を臨む。校舎は海拔 2 0 m の高台に位置するが、県道から約 1 0 m 下がったところにあり、高低差の大きい敷地である。校舎の北側は全て急な法面で大雨の際は土砂災害等の危険が考えられる。現在は 1 割以上の児童・生徒が学区外に居住しており、学区内外にかかわらず全校児童生徒が通学タクシーで通学している。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	9 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	2 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	0 回
	地震・津波	2 回
	地震・火災	0 回
	地震・洪水	0 回
	地震・土砂災害	0 回
	地震・原子力災害	0 回
	その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・緊急地震速報の仕組み（震源地からの揺れの伝わり方と緊急地震速報が流れるまで）について、児童生徒の実態に応じて指導を行った。



全校で事前指導

- ・小学校では事前学習として、業前の時間に「防災の時間」を設定し、緊急地震速報の音を全校児童で確認し、一次避難の仕方について実地体験を行った。

② 訓練の取組状況

- ・以前は校外に流れることのないよう、緊急地震速報受信機の音声を録音し、校内放送として利用していた。今年度は近隣住民への周知や合同参加の呼び掛けを行い、地域を巻き込んで緊急地震速報受信機を活用することができた。



机の下へ一時避難

③ 事後指導等

- ・避難訓練実施後は、小・中学生それぞれに分かれてその場で振り返りを行い、全員に発表の場を設けた。
- ・Google フォームを活用し、教職員にも、児童生徒の避難の様子や職員側の対応等について、振り返りを行った。



二次避難完了

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報、校内放送、メガホン等、どのような手段で地震の発生や避難指示を行っても、児童生徒は適宜対応し、真剣に訓練を行う様子が見られた。
- 訓練の内容に関わる事前指導や事後指導、学活での防災教育を大事に扱うことで、防災に対する意識がより高められている。
- 自他の命を守るために、多様な状況に対応した訓練を繰り返し行える環境を地域と連携しながら整備していきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	活用により、緊張感が格段に高まる。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	実際に災害が起きるときには、このようなサイレンがなるのかと、イメージすることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立渡波中学校

住 所 石巻市さくら町四丁目 1 番地

在籍数 277人

1 学校の概要（学校防災面）

渡波中学校区は、渡波小学校区、鹿妻小学校区からなる。全生徒が徒歩で通学する。一部、学区外に居住する生徒は保護者の送迎で通学している。周辺は土地が低く冠水する場所があり、これまでに何度か通行止めになっており、教職員や生徒の通行に影響を及ぼした。校地から北西の高台の稲井につながるトンネルが開通し、立ち退き避難の候補として検討を始めた。



また、校庭を駐車場、ピロティを受付にした引渡しが可能になったほか、校舎2・3階の吹き抜け部分に落下防止網が設置され、より安全な学校生活を送ることができる環境となった。一昨年度には、校舎北側2階と3階の死角となる場所に防犯カメラを設置し、更なる学校安全を目指している。

S P S 認証校として3年、東日本大震災から15年が経過する今年度、改めて災害安全について、充実した学校を目指している。

2 令和7年度避難訓練実施計画

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		6回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		6回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	3回
		地震・火災	1回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（ ）	0回
3	その他（訓練以外の活用実績）		・操作に関する校内研修 ・カムチャツカ半島沖地震に伴う津波警報に関する情報収集

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

①事前準備・指導等

- ・緊急地震速報受信機の使用方法を打合せ等で周知し、全職員が使用できるようにすることを考え、取扱説明書の写しをラミネート加工し、受信機の近くに常備している。
- ・今年度は、防災主任以外が発報を担当した訓練も実施した。

- ・東日本大震災による本校や学区の被害を知る事前指導を行った。
- ・部活動中の訓練については、部長会議を開催し、各活動場所でのリスクや適切な避難行動について考え、避難経路や避難場所について更新して実施した。

②訓練の取組状況

4/14 教室からの避難経路と、教職員の基本的な動きの確認を一番の狙いとして実施した。

5/1 新入生の所属部活動が決まり、活動場所からの避難を想定して実施した。

6/12 告知を行わず、給食直後に緊急地震速報受信機の放送を用いて、一次避難を行い、安全確認後に教室で点呼を取る訓練を実施した。



教職員による事前確認

6/23 消防署と連携し、非常時の心肺蘇生法講習及び屋上のプールでの事故を想定した教職員での訓練を行った。校舎の構造が特徴的であることを踏まえ、救急隊の入校経路などの確認もできた。

9/5 部活動中の地震・津波を想定し、顧問不在の部活動を設定し、運動部では2年生の部長を中心として、自主的に高所避難を行った。

11/5 地区別集会を実施し、地区のリーダーなど、組織の確認を行った。

11/9 石巻市総合防災訓練では、各家庭から近隣の避難場所へ移動した。その後、地区ごとに防災街歩きや立ち退き避難の検証を行った。

12/12 地震と原子力災害を想定し、引渡し訓練を実施する予定であったが、北海道・三陸沖後発地震注意情報発表中の津波注意報により、実際の引渡しの実施に変更して実施した。

③事後指導

- ・学校内外、卒業後も自主的に適切な避難行動を選択できる力を養うことを目標とし、各訓練後には生徒自身が考え、教師とともに振り返る時間を設定した。また、教職員を対象に Google フォームを活用した反省や意見反映の機会を設けた。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

○東日本大震災の経験がない生徒の防災意識や自主性を向上させることができた。

○緊急時の連絡手段を再検討し、本校の構造を考慮した訓練ができた。

●地域との連携が進んでいない。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	様々な想定での訓練やチェックマン役を設定することで、様々な角度からの意見が出ている。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	地震速報後の避難行動は大変迅速に行っている。今後は、様々なケースに対応できる力を付けさせたい。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立大街道小学校

所在地 石巻市大街道南一丁目3番1号

在籍数 216人

1 学校の概要（学校防災面）

学区の南側には石巻工業港があり、東日本大震災では、学区全域が浸水した。校地は高さ約1mの津波により浸水。校舎内は床上4～5cmの浸水。

校舎は鉄筋コンクリート3階建（屋上あり）。校舎、体育館ともに耐震補強工事済みである。本校の南側に高盛土道路が整備されたが、令和4年5月10日に公表された「宮城県津波浸水想定」では、「3～5m」となっている。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		11回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		5回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	4回
		地震・津波	1回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市作成の防災副読本「未来へつなぐ」を活用し、避難訓練の意義や避難の方法、学年に応じて地震のメカニズム等を指導した。
- ・各学級において、緊急地震速報の仕組みについて、どのような場合に音が鳴るのかを指導した。その後、緊急地震速報が鳴った時の避難行動について指導した。



防災副読本を活用しての事前指導

② 訓練の取組状況

- ・全校放送で緊急地震速報のアラーム音を2回流し、1回目はどのような音がするかの確認、2回目は机の下での身の守り方を指導した。
- ・緊急地震速報発報後、各教室等で1次避難を行った。その後、大津波警報が発表されたことを受け、校舎3階の学年ごと指定された教室へ避難した。



机の下への1次避難の様子

③ 事後指導等

- ・緊急地震速報の仕組みやアラーム音を理解することができたか、適切な避難行動をとることができたかなどについて、確認を行った。
- ・いつ、どのような場所でも適切な避難行動をとることができるように、防災の意識を常にもつことの大切さについて指導した。



真剣に話を聞く様子

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 緊急地震速報受信機を活用した訓練を毎年行うことで、実際にアラーム音が鳴った時にも落ち着いて避難行動をとることができた。
- 学校にいるときにアラーム音が聞こえた場合は、いつでも避難行動をとるということが確認できた。
- 様々な場所や時間を想定して訓練を実施したり、児童に適切な避難行動について考えさせたりすることで、いつでもどこでも身を守る行動が自らできるように今後も指導していく必要がある。
- 緊急地震速報が聞こえたら、児童の安全だけではなく、教員自身の安全も確保するように今後も徹底していく。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	教職員が落ち着いて児童や自身の安全を確保し、真剣に取り組む児童の育成に努めた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	緊急地震速報が聞こえたら、その場でどのような行動をとるのか考えることができるようになってきている。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立釜小学校

所在地 石巻市大街道西二丁目5番1号

在籍数 439人

1 学校の概要（学校防災面）

本校の所在地である大街道西二丁目をはじめ、一番谷地、二番谷地、浦屋敷、中屋敷、築山、新館、捨喰等の23の地区から成り立っている。東西約3km、南北約2km。最も遠い重吉町までは、自動車で15分ほどかかる。

平成23年に発生した東日本大震災により、学区の南側が津波により壊滅的な被害を受けた。現在、学区各地に復興住宅が建築され、復興が進みつつある。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	2回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・防災教育副読本や事前に職員に周知している避難訓練の計画を基に、事前指導をしている。
- ・緊急地震速報が鳴った際、児童は落ち着いて担任の指示を聞くことができるように指導をしている。
- ・いつ、どこにいても身を守る行動ができるようになるため、自分たちで考えて行動することの大切さを指導した。



保健室での訓練の様子

② 訓練の取組状況

- ・訓練当日は緊急地震速報受信機を活用し、担任がその場にいる訓練では担任の指示で動き、避難行動を行った。
- ・担任が教室にいない場合や、休憩時・清掃時にも訓練を行い、緊急地震速報が鳴った際に、児童が自ら行動を開始し、自分の身を守る姿勢をとった。
- ・津波を想定した訓練の場合は、防災頭巾を被って、校舎の３階以上に学級ごと避難することも取り入れた。



校庭への避難の様子

③ 事後指導等

- ・各教室で振り返りを行うことができるように、振り返りカードを活用している。
- ・緊急地震速報が鳴ってから訓練終了までの児童の行動を振り返り、実際に災害が起きた際の行動として適していたかななどを考えさせた。



振り返りカード

(2) 成果と課題 (○:成果 ●:課題)

○緊急地震速報受信機を使用した訓練を定期的に行うことで、児童も職員も実際に地震が起きた際にどのように動けばよいかが定着している。

○地震だけではなく、津波を想定した訓練もできているので、より実践的な訓練をすることができている。

●教室以外の場所や、授業時間以外で緊急地震速報の音が流れると、避難の移動の際に私語が多くなることがあったので、授業時間以外での訓練も回数を重ねる必要がある。

●他の放送の音楽と緊急地震速報の音の区別がつきにくくなったタイミングがあったので、日頃から放送をよく聞くことを児童に意識させていく必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	速報がなってから児童の安全を確保するまでの行動が素早くなり、次の行動に移ることができるようになった。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	訓練の回数を重ねるごとに、自分で考えて行動できるようになった児童が増えた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立二俣小学校

所在地 石巻市大森字大平 6 番地

在籍数 1 1 2 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は北に 8 k m、南に 5 k m と広く、2 0 名弱の児童がスクールバスで通学している。大きく二俣地区と大川地区に分かれ、大川地区においては、東日本大震災の津波により壊滅的な被害を受けた。

校舎は 2 0 1 6 年に大規模改造及び耐震工事をしている。一方で、校舎東側と北側には山を背負っており、土砂災害の危険性がある。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		2 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	2 回
		地震・津波	0 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	0 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市作成の防災教育副読本を活用し、学校生活における様々な場面での避難の仕方を指導している。
- ・一次避難行動として、基本的には机の下に避難することや基本姿勢はダンゴ虫になることを指導している。
- ・地震は繰り返し起こることを伝え、緊急地震速報を聞いたら、移動の途中でも安全な場所で身を守ることを指導している。



防災教育副読本を活用した事前指導

- ・教室にいる児童は、二次避難の際はヘルメットを着用させる。

② 訓練の取組状況

- ・業間の時間帯に行い、児童も教職員も各々の場所にいる。児童のみで教職員がいない場所もある。
- ・緊急地震速報（１回目）の音で、各自、机の下や倒れてくるものがない場所などで一次避難をする。
- ・トランシーバーなどで児童の安全確認や避難経路の安全確認を行った後、校長が二次避難を指示する。
- ・二次避難場所へ移動する途中で緊急地震速報（２回目）を流し、余震から身を守る。



一次避難（１年生教室）

③ 事後指導等

- ・全体会では、校長から余震に対しても安全に身を守ることの重要性について話があり、全校で振り返った。
- ・各学級では、緊急地震速報を聞いて安全な場所で身を守れたか、移動中に速報が鳴ったときはどんな行動をしたかを発達段階に合わせて振り返った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報の放送が流れたら、即座に机の下に避難したり、ダンゴ虫の姿勢になって身を守ったりすることができた。低学年であっても緊急地震速報の音を聞いてすぐに反応することができた。
- 緊急地震速報受信機を活用して余震を起こすことで、より実践的な訓練をすることができた。
- 二次避難場所へ移動中に緊急地震速報が鳴ったとき、すぐに身を守った児童もいたが、移動を優先させた児童も若干名見られた。まずは身を守ることを徹底させたい。
- 今年度は地震が起きた場合のみの活用だった。地震と土砂災害や地震と火災など複合災害の場での活用を図り、対応力を高めていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	自身の役割を踏まえ、緊急地震速報音が鳴った場合の児童に対する指導力が高まった。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	余震に対する知識は身に付いてきている。どんな状況下でも身を守れるよう、訓練を重ねていく。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立山下中学校

所在地 石巻市貞山五丁目3番2号

在籍数 172人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、旧北上川、北上運河に囲まれた平坦な地形であり、住宅地と商業施設が混在している。

東日本大震災では、1mの津波浸水があり、ライフラインの復旧には1か月以上を要した地域もある。また、他地区への避難時はいずれかの橋を通るため、交通が集中し渋滞が懸念される。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	11回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	2回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	1回
	地震・津波	1回
	地震・火災	0回
	地震・洪水	0回
	地震・土砂災害	0回
	地震・原子力災害	1回
	その他（ ）	0回
3	その他（訓練以外の活用実績）	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・月例の全校防災タイムでは、避難訓練の内容とリンクする防災副読本のページの読み合わせにより、災害のメカニズムや避難行動への理解を深めた。
- ・それを踏まえた上で、訓練当日の朝の会では、訓練の目的や具体的な身を守る行動に絞って確認を行った。また、新入生は本校の受信機の音声を聞いたことがない状態のため、事前学習で音声を試聴した。



教室内での避難訓練

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報受信機を活用し、震度6強、10秒後の設定で実施した。直ちに安全な場所に避難行動をとることができた。
- ・原子力事故避難訓練でも、今年は地震による事故を想定しているため、受信機を活用する予定である（昨年は発電所の単独事故の想定だったため使用せず）。



年度当初の避難訓練

③ 事後指導

- ・避難訓練終了後、学級ごとに、訓練の内容を自己評価させるとともに、防災だよりにより振り返りのアンケート集計結果や新たに気付いた点などを掲載し、成果や課題を共有することができた。
- ・防災副読本を用いて、それぞれの考えを引き出せるような設問を考えた。



部活動時の訓練

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○北海道・三陸沖後発地震注意報の発令中である12月12日、震度3の地震発生後に津波注意報が受信機より発報され、全校生徒が冷静に行動することができた。訓練放送による意識付けが効果的だったと思われる。

●校庭、特にスピーカーから遠いテニスコートでは、放送が聞き取りづらいことがあり、校庭にいる生徒には、職員室から拡声器で呼びかけることを全職員で共通理解する必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	スマートフォンのエリアメール等よりも、受信機の発報が迅速に行われることが実感でき、的確な判断につながった。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	事前の訓練の経験により、実際の地震で発報された際も落ち着いて行動することにつながった。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立中里小学校

所在地 石巻市中里五丁目7番1号

在籍数 154人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、石巻駅の北西約1.5kmに位置している。近年の経験やハザードマップの情報では、液状化や土砂災害の危険性は低い。しかし、旧北上川が氾濫した場合は、学校付近が0.5～3m、南中里地区が3～5m浸水すると予測されている。津波発生時は、学校付近が1～3m、南中里地区が3～5mの浸水が予測されている。学校付近の南西側の道路は強い雨が降るとよく冠水する。このように、水害による災害のリスクが高い。また、女川原子力発電所から、直線で約18kmに位置するUPZ圏内である。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		2回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	0回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（ ）	0回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・月に1回「中里小防災の日」として、業前活動に防災学習を行っている。防災教育副読本「未来へつなぐ」や「NHK for School」の動画を活用し、地震発生時の避難行動について指導した。基本は、机の下等に避難（机の脚を持つ）又はダンゴムシのポーズで身を守ることを確認した。
- ・授業中や休み時間などの学校内だけでなく、登下校中や各家庭での地震発生時の避難行動についても、発達段階に応じて指導した。

- ・事前指導で、児童にJアラートを聞かせ、実際に聞こえてきたときに落ち着いて行動できるよう指導した。

② 訓練の取組状況

- ・休み時間の地震発生想定避難訓練において、緊急地震速報受信機を活用した。児童は、速報音が鳴ると速やかに机の下に潜ったり、物が倒れてこない場所でダンゴムシのポーズをとったりして、自分の身を守ろうとしていた。
- ・今年度から教員は1人1台トランシーバーを携帯するようになり、素早い情報伝達や情報共有を行うことができた。



緊急地震速報の音源を聞き避難する6年生

③ 事後指導等

- ・児童は、振り返りカードや防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用して自己の振り返りを行った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報の音源や緊急地震速報受信機を活用した訓練を重ねることで、児童は素早く落ち着いて避難行動をとることができるようになった。
- 様々な場面を想定して訓練をすることで、児童だけでなく教員にとっても意味のある訓練ができた。
- 児童は、緊急地震速報を聞いて素早く反応できるようになっている。しかし、外で活動していた児童が急いで校舎に戻ろうとしていたので、校庭の真ん中に集まって揺れが収まるのを待つことの指導を徹底していきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	緊急地震速報が聞こえた時に自分自身の身を守るだけでなく、児童への適切な指示や避難経路の確保を行うことができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	緊急地震速報が聞こえたら素早く机の下に潜るなどの避難行動をとることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立開北小学校

所在地 石巻市大橋一丁目2番1号

在籍数 269人

1 学校の概要（学校防災面）

学校及び学区は、住宅地又は商用地である。また、低地にあり、海拔は0m以下である。

周囲に旧北上川が流れ、右岸堤防（高さ約3m）に囲まれている。海岸から直線距離3.15kmの平地にあり、土砂災害の危険は感じられないが、津波、洪水、内水氾濫等の水害、地盤の液状化、地割れ、地盤沈下等の災害の危険がある。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		7 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	4 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	1 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・ 訓練の目的や方法、避難経路を発達段階に応じて指導する。
- ・ 緊急地震速報が流れたら、避難行動に移るように指導する。
- ・ 教室以外で地震が発生したときの身の守り方を理解させる。



緊急地震速報受信機

② 訓練の取組状況

- ・各避難訓練において、教師は、災害を想定しながら児童へ避難指示をしたり、声掛けをしたりして身の安全を確保させた。
- ・児童は、教師の指示に従い、「おさるのポーズ」や「だんご虫のポーズ」をするといった避難行動をすることができた。
- ・緊急地震速報のアナウンスや、メガホンによる声掛けの際も静かに聞くことができた。



校舎3階に避難している様子

③ 事後指導等

- ・訓練終了後、防災副読本等を活用し、各学級で事後指導をしながら「頭を守ること」を再度確認した。
- ・大きな地震が発生した際は、繰り返し余震が来ること、洪水や津波などの災害が起きる可能性があることを伝え、一次避難だけでなく、その後の避難も大切だと伝えた。



防災副読本を使用した振り返り

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 教師は避難訓練を通して、緊急地震速報のアナウンスを聞きながら児童の安全を守るための指示や声掛けすることができた。
- 児童は避難訓練に真剣に取り組むことができていた。特に緊急地震速報のアナウンスが鳴り響いたときには緊張感を高めながら避難行動をすることができた。
- 次年度以降の避難訓練を実施する際は、従来の地震想定だけでなく、想定外の災害による避難を想定しながら計画・実施をしていきたい。
- 緊急地震速報を使用した避難訓練を行う際、教師側にも事前予告をせず、本番を想定した避難訓練を実施していきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	緊急地震速報のアナウンスから、児童への指示、声掛け等が迅速かつ的確に行われていた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	避難訓練に集中して取り組み、その後の事後指導では、防災副読本を活用した振り返りを行うことができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立河北中学校

所在地 石巻市小船越字山畑 2 5 0

在籍数 1 2 6 人

1 学校の概要（学校防災面）

旧河北町の南西に位置し、北上川・追波川・旧北上川の流れに囲まれている。

生徒は、3つの地区（二俣・大谷地・大川）から登校し、ほとんどの生徒は自転車で通学している（大川地区の生徒はスクールバスを利用）。

台風や大雨等によって、田んぼなどの低地に水がたまることや、北上川が氾濫・増水することにより、学区内に洪水や浸水の危険性がある。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	9回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	6回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	4回
	地震・津波	1回
	地震・火災	0回
	地震・洪水	0回
	地震・土砂災害	0回
	地震・原子力災害	1回
	その他（ ）	0回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・ログの閲覧機能（受信した地震情報の詳細）

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

（1）訓練の概要

① 事前指導等

- ・年度の最初に行われる地震想定避難訓練の後に、防災オリエンテーションとして、今年度の避難訓練について地震速報の使用の説明を行った。
- ・放送される音源に対して、不安を抱えている生徒がいないか確認をした。



防災オリエンテーションの様子

② 訓練の取組状況

今年度は全ての地震想定避難訓練において、緊急地震速報受信機「地震の見張り番」を活用した。

・ 4 / 3 0 地震・河北地区合同引渡し訓練

学級担任以外の先生が授業をしている時に地震が起きた想定で訓練を実施した。

一次避難や避難経路などについて、職員間で確認をした。また、引渡しについては、二俣小学校区と大谷地小学校区とで時間を分けて実施した。



・ 5 / 1 4 予告なし避難訓練

予告なしの避難訓練を行った。地震速報の音源の使用を事前に生徒に告知し、不安を感じる生徒がいないか確認して、教職員で生徒のメンタルケアにも配慮した。



・ 1 1 / 7 火災想定訓練

河北消防署員の方に来ていただき、火災受信機連動操作盤を使用して訓練実施した。火災発生時の情報共有の仕方や初期消火について助言していただき、煙道体験を行った。



各種訓練後の様子

③ 事後指導

・ 訓練後に全体講評や各教室の先生方の指導を実施した。その後、アンケートや話し合いを通して訓練の振り返りを行った。

・ 教職員に避難訓練の実施方法について振り返りしてもらい、成果や課題について振り返りを行った。その後、職員会議等で情報を共有した。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

○緊急地震速報受信機の音源や地震疑似音、揺れ始めるまでの予測時間を流すことで、臨場感を出すことにより、避難訓練での緊張感が高まった。

○生徒は緊急地震速報受信機からの放送内容について、理解が深まっている。そのため、生徒はダンゴムシポーズや机の下に身を隠すなどの第一次避難行動を素早くとれる。

●今年度10月の緊急地震速報受信機の更新に伴い、新たな機種 of 機能や操作方法等について、職員間で共通理解を図る必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	担当者以外の職員に受信機の使い方を周知し、複数人でその活用を行った。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	実際の緊急地震速報と同じ音が流れ、それに最初は驚くものの、すぐに避難姿勢に移ることができている。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立蛇田小学校

住 所 石巻市蛇田字上中埜 9 7 番地 1

在籍数 7 2 0 人



1 学校の概要（学校防災面）

学区は、石巻市の西部に位置し、三陸自動車道など幹線道路を複数有している。東日本大震災後、被災地域から移り住む住民が増加し、交通量の増加や地域の都市化がますます進んでいる。

学校周辺の道路は狭く、平時でも渋滞が発生しやすい。また、児童数が多いことや校舎の配置から、校舎内に十分な二次避難場所を確保したり、迅速に校舎外に移動したりすることが難しい。

東日本大震災では、学区の南側の北上運河沿いの地域が床上や床下に浸水した。学校に浸水はなく、校舎の窓ガラスが数箇所割れた。震災当日から同年 1 0 月まで避難所となり、最大 7 0 0 名以上が避難した。在籍児童の死亡、行方不明者はなかった。

近年の状況及び石巻市ハザードマップ等から次の点に注意している。

- ①学区全体が低く平坦な地形である。3 階建ての本校より高い建物が周囲に無く、近隣の向陽小学校までの道のりは約 1 k m で、地形分類上の旧河道や氾濫平野を横断する必要がある。
- ②学校は氾濫平野上にあり、周辺も同様あるいは砂州・砂丘になっている。そのため、地震による液状化や建造物の倒壊等の可能性がある。
- ③令和 4 年 5 月 1 0 日付けの「宮城県津波浸水想定」を受けた石巻市教育委員会の資料で、本校の想定浸水深はこれまでの「0 m」から「1 ～ 3 m」となった。
- ④旧北上川堤防が決壊した場合、学校付近は 1 . 6 m 程度の浸水が想定されている。本校は水防法又は土砂災害防止法に基づく市の防災計画において浸水想定区域の要配慮施設として位置付けられている。
- ⑤新下前沼地区や東前沼地区、新谷地前地区（J R 仙石線南側）は、過去の集中豪雨で冠水したことがあり、今後も大雨の際には注意をしなければならない。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		6 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	0 回
		地震・津波	3 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	0 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・業前活動の「防災タイム」を活用して、実施日時以外の訓練内容を伝えるとともに、適切な避難行動について指導した。
- ・安全な姿勢を取ることに加え、校庭・前庭では可能な範囲で壁面や遊具から離れること、校舎内では落ちたり倒れたりする物から離れることを指導するとともに、教室以外の様々な場所にいることを想定し、どのような危険性があるかを児童に考えさせた。
- ・今年度は、防災タイムを学級担任だけでなく教頭も各学年に入って指導を行い、児童に多くの視点での防災意識を高めることができた。

② 訓練の取組状況

- ・校内放送で緊急地震速報の訓練音を1分程度繰り返し流し、地震の発生を伝えた。
- ・児童はその場で避難行動を取った。
- ・休憩時避難訓練では、図書室や校庭などで過ごしていた児童も状況に応じて身を守ることができた。
- ・地域住民と児童の避難経路や避難場所を分け、極力自分の教室に避難できるように、教室配置、児童の避難場所を設定した。



2階に避難をする様子

③ 事後指導等

- ・訓練終了後、各教室においてタブレット端末を使用した訓練の振り返りを行った。
- ・適切な避難行動が取れたかを確認するとともに、各所での行動について全体で共有したり、学校以外で緊急地震速報を聞いた際の避難行動について確認したりし、気づきや学びを基に振り返らせた。
- ・今年度は地域住民、本校父母教師会役員、学校運営協議会委員の方が避難訓練を参観し、反省を記入していただいたことで、児童の避難行動における新たな気づきが得られた。



地域住民が参観する様子

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 適切な避難行動について改めて確認することができた。
- 教室以外の場所で地震が起きたらどのように行動したらよいか考えさせることができた。
- 地域の方と一緒に、避難場所となる教室を確認することができた。
- 緊急地震速報受信機の使用方法等について共通理解を図る職員研修を実施する。（教育課程検討部会内の防災安全部会で、実施できる研修を計画する。）

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	・受信機の活用や地域住民が避難訓練を参観し、より実践に近づけたことで、避難時の課題が明確になった。 ・緊急地震速報受信機の職員研修を実施する機会が設定できなかった。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	・緊急地震速報受信機を活用することで、より緊張感をもった訓練を実施することができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立向陽小学校

所在地 石巻市向陽町四丁目13番24号

在籍数 306人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、石巻市の北西に当たり、女川原子力発電所から半径20kmのラインをまたぐように学区が広がり、UPZ圏内（原子力施設からおおむね30km圏内）で避難、屋内退避、安定ヨウ素剤の予防服用等を準備する区域に入る。東に国道45号線、南西に国道108号線が走る。1965年に造成された通称「蛇田ニュータウン」と呼ばれる団地地域と、198



9年より造成されたあけぼの地区が大きな住宅地となっている。東日本大震災の被害が比較的少ない地域ということもあり、石巻赤十字病院周辺（わかば、あけぼの北）等に住宅着工が進んだ。一方で、学区の西部は農地が広がり、学区内全体で見れば豊かな自然も残る地域である。学区外から通学する児童は多い。

2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		8回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	1回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・各学級で緊急地震速報のアラーム音と同時に一次避難行動に移り、安全を確保するよう指導した。

- ・防災副読本「未来へつなぐ」を活用し、教室外にいるときにも物が落ちてこない、倒れてこない、移動してこない場所に避難することを確認した。低学年にはダンゴムシのポーズなどイメージしやすいような言葉で指導した。



② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報を流し、揺れが収まったという放送があるまで机の下で安全を確保させた。児童は揺れに備えて机の下にもぐり、机の脚を持つ姿勢（さるのおり）をとった。
- ・揺れている間、担任は児童に自身の安全確保をするよう指導した。
- ・揺れが収まり、二次避難を開始。事前に6年生3名が逃げ遅れた想定で行い、各棟を担当教員が搜索しながら避難することを行なった。



避難行動をとる児童の様子

③ 事後指導等

- ・各学級で担任が緊急地震速報を活用した避難訓練の事後指導を行った。放送をよく聞くことができたか、放送を聞いてすぐに避難行動をとることができたかなど、全体で振り返りを行った。
- ・防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用し、避難行動を振り返った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 訓練を重ねていることもあり、緊急地震速報のアラーム音への恐怖心を持たずに避難行動をすることができるようになった。
- 訓練に慣れてしまっている部分もあるので、訓練の内容に変化を加え、適度な緊張感を持たせるようにしたい。（アラーム音を2度鳴らす、など）

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	今回、初めての試みとして逃げ遅れる児童を設定したことで、より児童把握の意識が高まったと考える。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	事前・事後指導を各担任に指導していただいたことで、児童も訓練に真剣に取り組む様子が見られた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立飯野川小学校

所在地 石巻市相野谷字旧屋敷 5 6 番地

在籍数 1 1 8 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、東西 6 km、南北 3 km である。児童の 8 割は徒歩又は保護者送迎で通学している。また、2 割の児童はスクールバスを利用して通学している。2 0 1 1 年の東日本大震災では校舎に大きな被害はなかったが、学区の一部（本町・川前・五味・中野地区）は、北上川を遡上した津波で床下浸水したところもあり、本校体育館や市の指定避難場所に避難し宿泊した。



近年の状況及び石巻市ハザードマップ等から次の点に注意している。

- ①本学区は標高 3 m の平地にある。北上川の堤防より低い場所に学校があるため、河川氾濫や内水氾濫による浸水の危険がある。予想浸水深 0. 5 m ～ 3 m。
- ②校舎の裏は山（山麓堆積地形）になっており、集中豪雨に伴う土砂災害の危険がある。今年度秋からは、砂防堰堤工事が始まった。
- ③海からは 1 4. 8 km とかなり遠いが、大規模地震に伴う津波が北上川を遡れば、浸水の危険がある。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		9 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		2 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	0 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
	その他（ ）		0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・業前の防災学習の時間を使い、副読本「未来へつなぐ」及び消防庁や気象庁の公式動

画チャンネルなどを活用して地震や津波の恐ろしさや発生時の対応について学習した。また、休日や登下校中の対応についても動画を見ながら確認を行った。

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報音を聞いて、机の下に第1次避難した。その後校庭に第2次避難し、大津波警報が発表されたという想定で、校舎3階に第3次避難した。第3次避難の前には幼稚園長とも協議し（津波警報、注意報発表時は本校3階に避難することとしている）、6年生が幼稚園児の手を引いて校舎3階まで避難した。

③ 事後指導等

- ・校舎3階に避難した後に全体会を行った。校長による避難訓練の様子についての講評を行い、その後は学級ごとに事後指導を行った。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○計画どおりにスムーズに避難することができた。どの訓練もそうであるが、児童も危機感をもって取り組んでいた。

○昨年度は幼稚園との合同訓練ができなかった。今年度合同で訓練ができたことで、職員の入れ替えがあつたとしても、大まかな流れを全員で確認できた。

●帽子を携帯していない児童も数人見られた。持っていない、身に付けていない児童もいたため、日頃からの声掛けが必要である。



訓練準備の様子



一次避難の様子



三次避難の様子

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	児童の安全を守るために、瞬時に判断する力が付いている。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	行動が非常に速い。放送や指示を聞き洩らさないよう静かに行動することができる。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立稲井小学校

所在地 石巻市真野字八の坪 1 1 6 番地 1

在籍数 2 6 3 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、東西約 1 0 k m、南北約 7 k m と広大で北側、東側、南側には山があり、西側は旧北上川に接している。また、学区の中央部には旧北上川の支流である真野川が流れている。学校は 水田に囲まれており、集中豪雨時には周辺道路 が冠水する心配がある。東日本大震災では、旧北上川沿いの地域に浸水の被害があった。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		4 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	2 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
		その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・操作に係る校内研修	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・朝の会の時間に地震が起きた時の避難の仕方について考えさせたり、教員の話の聞いたりした。「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」安全場所に避難することを確認した。また、地震発生時には緊急地震速報が鳴ること、放送や担任の先生の指示を静かに聞くこと、適切に行動することの重要性を確認した。
- ・「未来へつなぐ」（市防災教育副読本）を活用して、様々な災害時の避難の仕方を学習した。



廊下で避難する様子

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報の放送が流れたら、教師が指示を出し、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」安全な場所に避難させる。
- ・緊急地震速報後に放送やハンドマイク、チャットで地震が発生したことを全校児童、全職員に知らせ、防災頭巾を着用させる。次の指示があるまで静かに待つように促す。
- ・教務や専科の教員、用務員は学校内の安全確認し、避難経路や校舎内の状況をトランシーバーで伝える。本部が適切な避難経路を放送やハンドマイク、チャット等を使い、全校に指示を出す。担任はその指示を基に児童を避難させる。



校舎屋上に避難する様子



消火体験をする様子

③ 事後指導等

- ・各学級で避難訓練について副読本や振り返りカードを用いて振り返る。緊急地震速報が鳴った後の一次避難の仕方、教室以外の場所で起きた場合、休み時間に起きた場合や登下校時に起きた場合などの避難の仕方についても確認した。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 児童、教職員共に実際に地震が起こったことを想定し、真剣に訓練に取り組んでいた。
- トランシーバー、Google チャット、放送などの様々な方法で情報を共有することで、安全確認と人数確認を確実に行うことができた。
- 教室以外で担任がいない場合の一次避難後の行動を教職員で共有し、確実に指示が出せるよう、様々な場面を想定して指導をしていく必要がある。
- 避難する際、出入り口通路が狭いので下学年を優先することや3階教室で学習していた学年は階段の内側(手すり側)を、2階教室で学習していた学年は階段の外側(壁側)を下りることなど校内のルールを徹底させていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	緊急地震速報後、児童への適切に指示を出し、訓練に臨機応変に対応する姿が見られる。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	緊急地震速報後に迅速に対応できる姿が多く見られるようになった。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立稲井中学校

所在地 石巻市真野字八の坪 1 1 6 番地

在籍数 1 4 9 人

1 学校の概要（学校防災面）

校舎は昭和 5 6 年 3 月完成で、東日本大震災でも倒壊せず、今後も倒壊等の危険性は低いと思われる。ただし、学校周辺全体が数センチ沈下し続けており、震災後に盛土をして埋めた校舎下、体育館下のすきまが再度大きくなってきている。校舎のつなぎ目のずれも大きくなり、老朽化した体育館の天井等は破損や落下の可能性を否定できない。



なお、体育館は耐震性を増すための補強工事を実施した。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		1 1 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		8 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	5 回
		地震・津波	2 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
	その他（ ）		0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		・操作等に係る校内研修

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

各クラスの担任は以下の点を訓練当日の朝の会で生徒へ指導した。

- ・緊急地震速報は、地震の発生後、強く揺れる前に揺れが来ることを伝えるための情報であること。
- ・速報が発表されてから対象となる地域に揺れが来るまではわずかな時間（数秒～数十秒）しかないこと。
- ・地震の揺れから身を守るには、その場所や状況に合わせて慌てずに行動する必要があること。

- ・慌てずに身を守る行動を起こすためには、その場その時に合わせてどのような行動を取るべきか想定しておくこと。

② 訓練の取組状況

- ・生徒は地震速報を聞くとすぐに一次避難として机の下に身を隠すことができた。
- ・次の指示が出されるまで、生徒たちは静かに待機することができていた。
- ・教員が生徒の避難と点呼をスムーズに行うことができていた。
- ・避難する際には、静かに素早く避難先に移動することができた。



緊急地震速報を聞いて避難をする様子

③ 事後指導等

- ・生徒の代表として執行部生徒が感想を発表した。
- ・帰りの会では、副読本を活用しながら振り返りを行った。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 緊急地震速報の作動時に自分の身を守るように行動する意識が身に付いた。
- 教職員が瞬時に一次避難の指示をできるようになった。
- 受信機を作動させるための研修会を実施し、教職員なら誰でも活用できる状態にしたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	体育館や廊下等、様々な場面を想定して訓練をしたことで、臨機応変に対応する力を身に付けることができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	放送や指示をしっかりと聞き、速やかに行動する姿が見られた。習慣が「慣れ」にならないように、職員による事前・事後指導が重要であると感じた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立河南東中学校

住 所 石巻市須江字糠塚 3 番地 3

在籍数 3 3 0 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、石巻市の北西部に位置し、東西約 1 0 k m、南北約 1 5 k m の広さで、女川原発から 3 0 k m 内の U P Z に当たる地域である。生徒の 9 割以上が自転車通学であるが、送迎による通学者が増加している。

校舎は丘陵にあり、学区内には旧北上川が流れ、広大な田畑地帯が広がる低湿地帯である。東日本大震災時は校地内に大きな被害はなかった。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数		7 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		4 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	3 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市防災教育副読本を用いた授業
- ・授業中、休み時間等の活動中に地震が起きた場合の避難方法の指導



地震想定避難訓練（一次避難）

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報受信機の機能を利用し、巨大地震発生時と津波発生の有無等状況を変えて訓練することができている。
- ・引渡しの態勢を素早くとることができ、確実に引受者に引き渡すことができた。



地震想定避難訓練（引渡しの態勢）

- ・引渡し訓練は、学区内のこども園、保育所、小学校と合同に実施できた。
- ・引渡し訓練の全体指導では津波避難だけでなく、原子力災害からの避難でも同じ隊形で引渡すことを確認した。
- ・「ショート訓練」は一次避難のみ実施した。
- ・「ショート訓練」は予告なしで行った。そのため、突然の警報に驚いた生徒も見られたが、「いつ起こるか分からないから気を付けたい」といった日常の心掛けを持たせることができた。



引渡し訓練の全体指導



ショート訓練（休み時間）



ショート訓練（給食終了時）

③ 事後指導

- ・Google フォームを用いて生徒の振り返りを行った。
- ・PTAやCS防災部会等に第三者評価を依頼しているが、都合がつかないため、参観できない状況が多い。それでも地域防災会議等で取組を共有して、できるだけ協力していただけるよう依頼している。
- ・災害安全の指導を学習指導の様々な場面で継続しており、避難行動の素早さなど成果が表れている。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報受信機による警報音に素早く反応できた。休み時間や清掃時等教室以外の場所での活動時の避難における安全確保行動も素早くできていた。
- 引渡し訓練において、整然と引渡しの態勢をとることができ、生徒は私語もなく真剣に訓練に取り組んだ。
- 地震・津波の災害想定ばかりなので、地震からの火災発生、地震からの原発異常など、巨大地震と関連させて行う避難訓練を実施したい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	訓練に臨む真剣な態度から
2	児童生徒の防災意識や技能	B	生徒の振り返り（感想）から

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立山下小学校

所在地 石巻市山下町一丁目10番10号

在籍数 140人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、東西約1.5km、南北約1.5km。学区外から通学している児童は、保護者による送迎。学校から最も遠い地区までは、通常時に自動車で5分程度かかる。明神山地区は同じ丘陵地にあるが、山下町1丁目、2丁目の一部を除く他の地区は平地に位置している。

学校は、現校舎は昭和59年完成で倒壊等の危険性は低い。東日本大震災において、避難所として約800人の避難者が利用した。駅から近く高台のためか、帰宅できなかった人や水が来た人が避難してきた。

平成24年に体育館の耐震工事が完了した。また、平成25年に校舎・体育館の災害復旧工事、平成27年から老朽化対策工事が行われた。

校地は、丘陵地にあるため、津波や洪水の危険性は事実上ない。本校は、石巻市地震防災マップで木造建物全壊率危険度1の場所と示されており、液状化による地割れなどの被害は低いとされているが、校庭西側のフェンス外の下へ続く崖が崩れる危険性はある。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施内容を含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		4回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	4回
		地震・津波	0回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等（〇職員、・児童）

〇職員室の職員と防災担当で操作法を確認する。

〇職員会議で受信機と音源を活用した訓練について、教職員間で共通理解する。

- ・ 学年ごとに発達段階に応じた指導を行う。揺れる前に放送されるが、実際は速報が間に合わない場合もあることや「到達秒数」について必ず指導・確認を行う。

② 訓練の取組状況（〇職員、・児童）

〇担任は放送の情報を聞き取り、避難経路確保のため教室の出入り口を開けると共に児



受信機の近くに取扱説明書

童を安全な場所で一次避難できるように誘導しながら児童の様子を見取り、自分も身を守る行動を行う。

○時には、児童に対して指示や声掛け等をしないで、児童の行動を見取り、今後の指導に生かす。

- ・担任がそばにいる授業中以外にも、業前の活動や業間・昼休み等の休み時間や清掃時に受信機の音源が流れ、自主的に一次避難行動を行う。
- ・児童は速やかに「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」安全な場所を素早く判断し、それぞれの場所に応じて身を守る動きをする一次避難を行う。



一次避難中（下学年へ声掛け）

- ・事前指導で確認した行動を落ち着いて行い、机の下での「おさるのポーズ」や、広い場所での「ダンゴムシのポーズ」など、安全性を高める行動を行う。

③ 事後指導（○職員、・児童）

- 訓練時に、緊急地震速報受信機の放送をしっかりと聞いて避難行動に移せたか確認する。
- 放送内容を生かした避難方法を確認する。また、臨機応変に自分で考え安全で自主的な一次避難を讃え、自主的に考えて行動する児童の育成を目指す。
- ・通年活用している振り返りカードに各自記入し自己の振り返りを行った。その後、学級で話し合い、避難の仕方や注意点について確認した。
- ・緊急地震速報受信機の音声と、放送による指示をよく聞くことを再度確認した。



訓練後の振り返りの様子

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報受信機を導入してから3年が経過し、今年度は訓練音源を4回活用した。訓練機能を生かした訓練に取り組めた。児童も訓練時の放送にも慣れ、落ち着いて内容を聞き取り行動できるようになってきた。
- 受信機の訓練機能の到着秒数を調整することで、より実践的な訓練ができた。また、到着秒数について児童に、説明することで地震の特性を理解することにつながり、実際の揺れに対して効果的な対応ができるようになってきた。
- 防災担当など、一部の職員が操作することが多く、その他の職員は受信機を操作する機会が少ないので、操作する機会を設け、扱いに慣れておく必要がある。
- 受信機の一部（訓練機能）しか活用していないので、それも毎回同じようなことを繰り返している。いつもの訓練設定はスムーズにできるようになったが、受信機に備わっている機能や設定を理解し、アナウンスなどの設定を毎回変えるなどして、より有効な訓練が実施できるようにしていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	受信機の取扱いが全職員できるわけではないが、訓練時に声の連携がよく、効果的な誘導ができています。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	知識として身に付いているだけでなく、知識を基に臨機応変な行動がとれる児童が増えてきた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立蛇田中学校

所在地 石巻市茜平五丁目 3 番地 1

在籍数 5 7 3 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、平地にあり田んぼを整地して建設された。崖などもなく土砂災害の危険はない。校地の標高は 1.6 m である。現在は仮設校舎で教育活動を行っている。

通学路のうち、新東前沼、新下前沼の水路沿いが豪雨時に冠水することがある。向陽町・あけぼの地区は、泥地の地盤で震災時液状化現象が発生した。

女川原子力発電所 30 km 圏内 (UPZ) の立地である。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		6 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・市の防災教育副読本を活用し、避難訓練の意義や避難の仕方について指導した。
- ・「防災の日」（年間 12 回、業前、全校一斉）を活用し、様々な種類の災害や、様々な場面でのより安全な避難の仕方について指導している。



「防災の日」の指導の様子（1 年生）

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報受信機を活用し、地震発生直前から素早く避難行動ができるようにした。
- ・校内の放送機器が使えない設定で訓練を行い、トランシーバーを活用した情報共有、指示伝達を訓練した。
- ・原子力避難訓練では、原子力災害について放射線の危険を学び、教室の窓の目張りや窓側から離れた避難を行った。



緊急地震速報を使った訓練の様子

③ 事後指導等

- ・訓練実施後、振り返り用紙を記入し、自分の避難行動を振り返り、良かった点や改善点を確認し、今後に生かした。
- ・教職員の反省を生かし、避難訓練の内容や設定が毎回同じにならないように改善した。
- ・美化防災委員会の話し合いの中でも、避難訓練の振り返りを行い、避難行動の成果と課題をクラスに伝えることで防災意識の向上を図った。



教室の窓の目張りの様子

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 緊急地震速報受信機を活用し、一次避難を開始したが、生徒は落ち着いて、素早く行動できていた。
- 実際の災害時と同じ放送内容で訓練をすることで、いざという時も焦らずに避難ができると考えられる。
- 避難経路についても、様々な状況を設定し、複数の経路での訓練を行っていききたい。
また、けが人がいる場合や不明者がいる設定など、より実際の状況に近い訓練を行なっていききたい。
- 緊急地震速報の音が苦手な生徒もいるので、配慮が必要なことを感じた。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	緊急地震速報機の音を聞くと、職員が素早く行動し、役割に分かれて行動ができていた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	速報音や放送内容をしっかりと聞き、落ち着いた避難行動が見られた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立河南西中学校

所在地 石巻市北村字小崎一 3 7 番地 2

在籍数 1 7 6 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、広渚小学校・北村小学校・前谷地小学校の3校から成り立っている。前谷地・広渚地区は水田地帯が広がっており、近くには旧北上川もあり大雨の際は洪水の危険性がある。また、北村小学区は林野に覆われているため大雨時には土砂災害の危険性が高まる。河南西中学校の敷地は海拔30mの位置にあるため浸水の危険性は極めて低い環境にある。加えて切り土による台地になっているので、土砂災害の危険性も低い。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		1回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	0回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	0回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- 緊急地震速報受信機を活用して地震発生時の身の守り方を学ぶために、生徒へ次の点を指導した。
- ・大きな揺れが来る前に、身を守るための「最後の猶予時間」を知らせるものであり、速報後すぐに行動する必要があること。
 - ・机の下に入る、頭部を守るなど、「自分の命を守る姿勢」を瞬時にとることが最優先であること。



事前指導の様子

- ・慌てて走らない、人を押さないなど、周囲の安全に配慮すること。
- ・受信機の役割を理解し、実際の警報音を聞く狙いと、訓練で落ち着いて動ける力を身に付けること。

② 訓練の取組状況

- ・訓練では、事前に指導したとおり、受信機の警報音が鳴ると同時に、生徒は机の下にもぐる・頭部を守るなどの安全確保行動を素早く取ることができた。
- ・揺れが収まった後は、教師の指示に従い、廊下の安全を確認しながら避難経路を通して校庭へ移動した。生徒は落ち着いて行動し、走らない・押さないなど、周囲に配慮した避難態度が見られた。



③ 事後指導等

- ・過去の大きな地震や直近の地震による被災状況、季節柄に関する自然災害や二次被害などを説明した。防災副読本のみならず、各教科で取り扱える内容等、より詳しい説明を動画で閲覧させた。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○警報音への即時反応が定着

受信機の警報が鳴った直後に、生徒が落ち着いて机の下に入るなど、身の安全を確保する行動を素早く取ることができた。

○避難行動の協力性が向上

教員の指示をよく聞き、走らない、押さないなど、周囲に配慮した態度で安全に避難する姿が見られた。

●一部の生徒で初期行動のばらつきが見られた

警報音への反応が遅れたり、戸惑う生徒が一部に見られ、緊急時の行動判断のさらなる定着が求められる。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	避難誘導では安全確認の声掛けや生徒の動きを把握した指示が適切に行われ、役割分担に基づいた連携が円滑に機能した。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	警報音を聞いて即座に安全行動を取るなど、地震時の基本動作を確実に実践できた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立須江小学校

所在地 石巻市須江字代官 4 3 番地

在籍数 1 8 1 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区のほとんどは山地であるが、山根地区・中埴地区などの一部は平野・低地（湿地）に囲まれている。校舎は山地に造成された高台にあり、校地の標高は 1 3 . 5 m である。

宮城県北部地震や東日本大震災などでは大きな被害はなく、体育館に避難所を開設した。学校周辺は斜面が多く、一定雨量を超えたり、地震が発生したりするなどでも土砂災害発生のおそれがある。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1 回
		地震・津波	1 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	1 回
		その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）		・ 校内研修 ・ 安全点検時の動作確認

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・ 訓練前に防災副読本を用いて避難方法や災害について指導を行った。また、電子書籍版を紹介し、いつでも学習できるようにした。
- ・ 年 1 0 回の防災の時間（業前活動）を活用し、学年に応じた避難の仕方を指導した。
- ・ 音に敏感な児童もいるため、配慮を要する児童に対しあらかじめ音を聞かせた。



訓練前の動作確認

② 訓練の取組状況

- ・放送で音が流れたらすぐに机の下にもぐり、身を守る行動をとらせた。
- ・揺れが収まった後も、避難経路の確認等の時間を10分間確保し、避難指示が出るのを待たせた。
- ・一次避難、二次避難後には高台である駐車場まで避難させ、より高い所へ避難するように指導した。



避難後の全体指導

③ 事後指導等

- ・全体指導後に各教室に戻り、各学級で振り返りを行った。その際、副読本に振り返りを記録して今後の訓練に生かせるように指導した。
- ・机の下に潜るだけでなく、机自体が倒れないようにするよう指導した。

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 教職員間で避難経路を確認し、速やかに避難できるように意見交換を行った。そこで新たに避難経路として使える場所を見つけることができた。
- ショート訓練として短時間で行うことができ、児童がとるとっさの行動も見ることができ、事後指導に役立った。
- 管理職不在時、受信後の停電、余震など様々な状況を考え、来年度以降の訓練に反映させていく必要がある。
- 訓練時の放送が校外にも流れるため、改善が必要になる。また、校内放送との混線で流れないこともあり、事前確認が必要である。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	学年に応じた指導するよう会議等で共通理解をした。避難してくる児童の姿から真剣さにばらつきがあるため、学級での指導を徹底させたい。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	避難訓練だけではなく、防災学習としての時間を確保することで、身の回りの危険箇所を見つけられるようになった児童もいる。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立前谷地小学校

所在地 石巻市前谷地字沖埵 1 2 5 番地

在籍数 1 2 3 人

1 学校の概要（学校防災面）

本校は、石巻市の北西部に位置し、小学校周辺に平坦な土地が広がる水田地帯である。

学区は、5地区に分かれ、学区のほとんどが後背低地であり、西部、東部、南部に山地がある。近くを江合川、旧北上川が流れていることから、市のハザードマップでは、大雨や台風の際に洪水の被害が予想されている。



また、女川原子力発電所から30km圏内にあり、再稼働後に事故が発生すれば被害が及ぶことが予想される。さらに、令和元年の東日本台風の際に、学区内で土砂崩れが起こっているため、土砂災害による被害も予想される。

東日本大震災では、内陸部にあることから津波は到達せず、人命、建物ともに大きな被害は無かったが、浸水地域から200名以上が体育館へ避難してきた。

2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	11回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	4回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	3回
	地震・津波	0回
	地震・火災	0回
	地震・洪水	0回
	地震・土砂災害	0回
	地震・原子力災害	0回
	その他（地震・引渡し）	1回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・操作等に係る構内研修 ・緊急地震速報の視聴・確認

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・業前活動の「防災タイム」などを利用して、訓練内容や災害対応を伝えるとともに、適切な避難行動について指導した。



安全姿勢の掲示

- ・シェイクアウト訓練時に活用している安全姿勢の掲示物を常に各教室に掲示し、いつでもどんなときでも避難行動が取れるように防災意識を高めている。
- ・「未来へつなぐ」を活用し、地震災害や避難行動などを確認した。

② 訓練の取組状況

- ・初めての緊急地震速報受信機を使った訓練では、事前に緊急地震速報受信機の音を聞かせ、確認をした。
- ・授業時間、休み時間など、様々なシチュエーションを想定し、訓練を行った。
- ・児童は、各教室でヘルメットを被ったり、机の下に隠れたりなどの避難行動を取った。
- ・高学年が中心となり、声を掛け合いながら低学年を安全な場所へ誘導する姿が見られた。



教室で避難行動を取る児童の様子

③ 事後指導等

- ・訓練終了後、各教室で担任による事後指導を行った。
- ・事後にも「未来へつなぐ」を活用し、災害発生時の対応等を振り返った。
- ・学校だけではなく、登下校中や家、旅行先などでの避難行動等についても確認をした。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 緊急地震速報受信機の地鳴りの音源を活用したことで、実際に災害が起きたような想定で児童や職員の防災意識が高まり、真剣に避難行動を取ることができた。
- 様々な場所での適切な避難行動を確認することで、どの場所においても避難行動が取れるように考えることができた。
- 本校の放送設備の関係で、緊急地震速報受信機の音源の音量が小さく、校庭にいる児童の避難が遅れることがあった。児童同士で声を掛け合いながら避難をすることで臨機応変に対応しているが、改善が必要である。
- 事前に予告をしない訓練では、まだ避難行動に個人差や学年差があるため、いつ、どんな時でも避難行動が取れるように、今後も訓練や指導が必要である。
- 今年度後期から体育館工事に伴い、避難場所の変更があるため、児童・職員ともに情報共有や避難行動の確認が必要である。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	臨機応変な避難行動について、学年に応じて考えさせる指導をしている。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	学年に応じた避難行動をする児童が増えているが、今後も訓練を積み重ねていくことが必要である。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立桃生小学校

所在地 石巻市檜崎字高附 5 番地

在籍数 204 人

1 学校の概要（学校防災面）

学区は、石巻市の北部の内陸部にある。東日本大震災では、海からの距離は17kmであり、津波の被害は受けることがなかった。旧北上川・新北上川から約3kmと二つの河川に挟まれる位置に学区があり、多くの水田が広がっている。両川から取水・排水する用水路が学区内を通っており、両川が大雨・台風等で氾濫した場合、多くの地域で浸水の恐れがある。校庭は浸水の恐れがあるが、校舎は標高4.5mと高台にあり、河川の氾濫が起きた場合、校舎2・3階を避難場所としている。



2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		7回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		3回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1回
		地震・津波	1回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要【地震・休み時間】

① 事前指導等

- ・石巻市作成の防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用し、避難訓練の意義や避難の方法について指導した。
- ・各学級において、緊急地震速報が聞こえた際は、慌てず冷静に「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所に移動し、ダンゴムシのポーズを取ることに確認した。特に今回は休み時間中に地震が発生したことを想



副読本を活用した事前指導

定して行うため、様々な場所（校庭や廊下、特別教室等）での身の守り方について確認した。

② 訓練の取組状況

- ・緊急地震速報の音を流し、第一次避難をする。
児童も教員も普段どおりに過ごし、それぞれの場所で第一次避難をした。
- ・放送での指示で、教室に戻り、担任は人数確認を行い、トランシーバーを使って本部に報告した。
- ・人数確認完了後、放送で全体会を行った。



校庭で一時避難をする様子

③ 事後指導等

- ・年間を通して使うことができる振り返りカードを全校共通で活用し、累積や振り返りを行うことができるようにした。
- ・地震発生までのリードタイムを意識させ、その時間でできることも考えさせた。
- ・学校以外で緊急地震速報を聞いた際の避難行動について確認した。

振り返りカード

(2) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- 予告なしの訓練であったが、高学年が低学年に積極的に声を掛け、避難を誘導したり、安心するよう声掛けしたりするなど、高学年らしい行動を取る児童の姿が見られた。
- いづくどこにいても迅速な避難行動を取ることにについて考えさせることができる取組となった。
- 緊急地震速報受信機の使い方について、今後職員研修等で動作確認をする必要がある。
- 児童全員が東日本大震災を経験していない世代であることを踏まえ、震災当時の様子について伝える機会を設け、児童の防災意識を更に高めていきたい。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	職員が決まった動きにならないよう、あえて細かい職員の動きや役割等を決めずに実施したが、職員同士で声を掛け合い、迅速に安全確認、情報共有をすることができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	児童同士で声を掛け合う姿が見られた。全ての児童が各場所に応じた避難行動を取ることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立北村小学校

所在地 石巻市北村字幕々崎一 1 7 番地

在籍数 4 7 人

1 学校の概要（学校防災面）

本校の学区は石巻市の北西部に位置しており、北は前谷地、東は広瀬、南は東松島市の矢本、西は美里町と接している。

平成 1 5 年の宮城県北部地震により校舎と体育館が全壊し、平成 1 7 年に新校舎が建設された。東日本大震災での被害は軽微だったが、照明器具が落下したり校庭が地割れしたりする被害があった。



津波の被害を受ける危険はほとんどないものの、大雨等による洪水や土砂崩れが起こる危険が高い。校地の北側が土石流の警戒区域に入っており、裏山から土石流に襲われる危険がある。また、学区のほとんどが山地であり、ほぼ全域が土砂災害の危険区域である。特に朝日・大沢地区の通学路は山間部を通るため、土砂災害が起こる危険が極めて高い。また、学区の東部は氾濫平野であり、表沢地区は大雨の際に用水路があふれ、道路が一部冠水する可能性がある。

2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）	5 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数	1 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	
	地震のみ	1 回
	地震・津波	0 回
	地震・火災	0 回
	地震・洪水	0 回
	地震・土砂災害	0 回
3	地震・原子力災害	0 回
	その他（ ）	0 回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・不審者対応訓練

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・ 1 0 月 2 3 日、防災の時間（業前）に防災教育副読本を活用しながら、地震発生時の避難行動について確認した。

- ・防災主任が全校放送で緊急地震速報受信機の簡単な仕組みを紹介するとともに、訓練時に児童が驚かないよう、実際の音源を聞かせた。

② 訓練の取組状況

- ・10月29日、8時35分に震度6弱の地震が発生する想定で緊急地震速報受信機を発報。リードタイムは10秒。児童は防災頭巾をかぶり、机の下に潜って頭部を保護した。
- ・余震の恐れがあるため体育館へ二次避難をするよう校内放送で指示。避難経路を通り体育館へ避難した。



二次避難の様子

③ 事後指導等

- ・体育館での全体指導で、命の守ることの大切さについて再確認した。
- ・学級では、防災教育副読本を活用しながら自分の避難行動について振り返りを行った。

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

○緊急地震速報を聞いてからの児童の反応が素早かった。全ての児童が即座に防災頭巾をかぶり、机の脚を対角線に持って体を安定させることができた。

○教職員も直ちにヘルメットをかぶり、持ち出し袋を準備し、教卓等で身を守っていた。避難途中、図書室前を通る際は、本棚が倒れる危険性について児童に注意喚起する教職員もいた。児童は本棚を避けながら避難していた。



机の下で身を守る児童の様子

●体育館へ避難する通路はガラス窓が多い。ガラスの破損、天井板の落下等により避難経路を柔軟に変更する必要も考えられる。避難経路を複数設定し、状況に合わせて選択できるようにしたい。

●今回の訓練では、担任不在の学級にはあらかじめ他の教職員を配置し対応に当たった。災害の日時によって担任不在の場合もある。担任不在の際に災害が起こった時どう行動したらよいかという点も指導する必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	訓練を参観して下さった宮城教育大学の林田先生や2名の保護者から高評価をいただいたため。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	素早く正しい行動をする児童がほとんどだったことを教職員が見取っていたため。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

石巻市立桃生中学校

所在地 石巻市桃生町寺崎字植立20番地

在籍数 143人

1 学校の概要（学校防災面）

東西約11km、南北約11km。学区内の旧3小学校は今年度から統合し、4月より新桃生小としてスタートしている。ほとんどの生徒は自転車通学をしており、遠い地区の生徒は、通常時でも自転車で30分ほどかかる。学校及び学区の大部分は低地にある。学区全体を囲むように北上川と旧北上川が流れている。



平成23年3月11日の東日本大震災では、校舎内には、ひび割れ、壁の崩落等があったが、大きな被害はなかった。学区の一部分について、道路の地割れや陥没等が見られた。しかし、一部地域においては建物の倒壊が見られ、在校生の一部生徒の家が半壊及び一部損壊の被害を受けた。在校生の死亡者・行方不明者はなかった。

2 令和7年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和7年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		12回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		6回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	5回
		地震・津波	0回
		地震・火災	0回
		地震・洪水	0回
		地震・土砂災害	0回
		地震・原子力災害	1回
		その他（ ）	0回
3	その他（訓練以外の活用実績）	・操作等に係る校内研修 ・地震の規模や震源地等に関する情報収集	

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・石巻市作成の防災教育副読本「未来へつなぐ」を活用し、避難訓練の意義や避難の方法について指導している。
- ・緊急地震速報受信機の設置に当たり、全校集会で、設置の意義と機械の特性について説明した。



全校集会での受信機についての説明

② 訓練の取組状況

- ・震度 5 強、リードタイムを 20 秒に設定し、事前に日時を告知して実施した。発報と同時に生徒の自主的な判断と各担任の声掛けにより、机の下への避難と同時にヘルメットを着用する行動が見られた。また、二次避難場所へ移動する際にけがをして松葉杖をついている生徒に自主的に手を貸す生徒がおり、まさしく「共助」の場面が見られた。さらに、生徒が生徒に指示を出す面が見られ、自主的に判断し、行動していた。



一次避難の様子

③ 事後指導等

- ・事後の振り返りでは、各学級で未来へつなぐを活用し、地震が起きる仕組みについて再確認するとともに、担任から緊急地震速報受信機の機能について再度説明をし、緊急時に備える意識の高揚を図った。



第 2 次避難後の点呼の様子

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 事前に受信機を用いてシェイクアウト訓練を行っていたので、警報音に驚くような生徒はなく、落ち着いて避難行動をとっていた。
- 第 2 次避難の際にはヘルメットをしっかりと着用し、教師の指示に従い、整然と避難していた。
- 本校の放送設備の老朽化も問題もあり、放送がやや聞き取りにくい教室があった。早急に改善が必要である。
- 事前の説明をしていたがリードタイムについて十分に理解していない職員及び生徒がおり、今後も緊急速報受信機の特性を理解した避難行動がとれるようにする必要がある。
- 避難場所は今回は砂利の駐車場としたが、集合場所付近に電柱が立っているなど、やや検討の余地があり、複数設定しておき状況に応じて選択する必要がある。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	受信機の特性を理解し、リードタイムに応じた適切な声掛けを各学年行っていた。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	警報が鳴ってから第 1 次避難までの行動が速やかにできている。災害時の約束事であるヘルメットの持参及び着用については一部の生徒について今後も声掛けが必要である。

A 「大いに高まった」 B 「やや高まった」 C 「変わらない」 D 「低下した」

石巻市立桜坂高等学校

所在地 石巻市日和が丘二丁目 1 1 番 8 号

在籍数 2 8 7 人

1 学校の概要（学校防災面）

本校は、日和山中腹に位置し地盤は比較的堅固である。津波浸水区域外である。しかし、校地の南側は崖になっているため、豪雨による土砂災害の注意が必要である。

学区は、石巻市・東松島市・女川町・塩釜市・涌谷町など宮城県内から通っている。様々な地形の環境から登校している。

学校周辺の通学路は低地と丘陵地である。



2 令和 7 年度「緊急地震速報受信機」活用実績（年度内の実施予定も含む）

1	令和 7 年度避難訓練実施総数（ショート訓練等も含む）		3 回
2	上記「1」の総数のうち、「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の実施回数		1 回
	※「緊急地震速報受信機」を活用した訓練の詳細	地震のみ	1 回
		地震・津波	0 回
		地震・火災	0 回
		地震・洪水	0 回
		地震・土砂災害	0 回
		地震・原子力災害	0 回
	その他（		

3 緊急地震速報受信機を活用した防災教育の実践

(1) 訓練の概要

① 事前指導等

- ・緊急地震速報が流れた際に、その場所で自分の身を守る行動を取るよう担任から説明をした。その後、周囲の状況を確認しながらクラスに集合するように生徒へ伝えた。
- ・教職員にもその場で自分の身を守る行動をとることと、実際の発災を想定しているため揺れが収ま



各クラスにて事前指導

るまでは移動しないことを伝えた。

② 訓練の取組状況

- ・12時50分からの昼食休憩時の発災を想定した。生徒は普段通りさまざまな場所で緊急地震速報を聞いてリードタイムを活用して身を守る行動を取った。
- ・放送をよく聞き、中には「シー！」と周囲に注意を促す生徒もいた。また、「窓から離れて！」と声を掛ける姿も見られた。
- ・教職員は指差し確認をしながら、丁寧に安全確認を行っていた。



生徒のシェイクアウト訓練

③ 事後指導等

- ・緊張感を持って訓練に臨んでいた。緊急地震速報が流れて約10秒のリードタイムを活用して周囲の状況や自分の身を守る行動の準備をするように伝えた。
- ・自分のクラスにいない時、戻れない時などを考えてその場の状況を自分で判断して身を守る行動を取れるように避難訓練を真剣に取り組むように伝えた。



教員の報告訓練

(2) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 昨年度から緊急地震速報の音源（類似の音源）で避難訓練を実施しており、緊張感がある訓練が実施できた。特に生徒が音が鳴ると身を守る行動を取るようになってきた。
- 教職員による避難経路の安全確認については、役割分担が適切に行われ、複数人ごとに担当を割り当てることができた。
- クラスによって避難行動を「とる」「とらない」がはっきり分かれ、クラスの雰囲気、意識の差が見られた。教職員の打ち合わせで生徒へ対しての伝え方や訓練の重要性の目線合わせが必要だと考える。
- 地震発生後は津波の有無など、情報を収集しなければならない。役割を事前に決めておくことで改善につながると考える。

4 緊急地震速報受信機の活用に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	・ガラスが飛散状況などの実際の被害をイメージした対応ができた。 ・冷静に生徒名簿を活用しながら人員確認をすることができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	・訓練放送が入ると急いで机の下に身を寄せる姿が多く見られた。 ・周囲に注意を促したり、他の生徒を気遣う声がけをしたりする姿も見られた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

3 「復興・防災マップ」の取組

実践協力校：石巻市立大谷地小学校

石巻市立桃生小学校

石巻市立万石浦中学校



復興・防災マップの取組

石巻市立大谷地小学校

1 ねらい

- ・自転車通学の中で危険箇所を発見・共有し、児童の危険予知力を高める。
- ・縦割り班活動を通して高学年のリーダーシップを育成し、低学年の安全意識を育てる。
- ・家庭や地域と連携し、地区全体の防災意識向上を図る。
- ・WEBでも閲覧できるようにし、防災意識の共有と継続的な改善を可能にする。

2 テーマ

『地域とつなぐ・つながる復興・防災マップ ～広がれ!大谷地の未来～』

3 指導時数

3年生：5時間 4年生：15時間 5年生：10時間 6年生：10時間

4 指導の流れ

段階	主な学習活動【学年 時数】※未表記はその他の教科・領域
つかむ	○災害について知っていることを話し合う。 ○予想される大谷地の災害について知る。 ・沢田山避難訓練（全学年） 児童が暮らす12行政区長にも参加の協力をいただき、顔を合わせることで安心感や連携の土台を作る。 ○地域の地形・特徴・災害特性から、誰のためのどんなマップを作りたいかを話し合う。【4～6年生・2時間】
深める	○地域の危険箇所の共有と可視化 ・登校班ごとの自転車通学による地域の危険箇所の発見（登下校時） Google フォームの活用【4～6年生・R5より通年】 ○河川と水害への理解を深める学習 ・北上川下流河川事務所出前授業 「マイタイムラインを作ろう」7月3日（木） 【5年生・1時間】 ・浸水時の避難行動の改善・修正 「マイタイムラインのブラッシュアップ」学習 9月10日（水）【5・6年生・1時間】 ・北上川見学「水害について知ろう」6月26日（木） 【4年生・2時間】 ・宮城県防災砂防課出前授業 「知育の土砂災害について知ろう」【4～6年生・1時間】 ○「つなぐ・つながるプロジェクト」事前学習 ・発表準備10～11月 【4～5年生・2時間 6年生・3時間】 ○「しめ縄づくりに挑戦」10月16日（木） ・地域の老人クラブの方々をお招きして伝統文化を学ぼう。 【3・4年生・2時間】 ○総合防災訓練時の事前学習 11月5日（火） ・「地区防災訓練参加時の役割分担や、インタビューすることを考えよう。」【4～6年生・1時間】



伝える	○地区長さん北上川下流河川事務所職員、市職員と一緒に避難の仕方を考える。言葉の学習「はん濫危険水位」 ・「マイタイムラインを地域の方に紹介して、適切な避難の仕方を考えよう」9月26日（金） 【4・5年生1時間】 ○学芸会 10月11日（土） 3・4年生防災劇 「大谷地小学校SOS～熱き友情と4色の井～」 【3年生・3時間 4年生・2時間】 ○「つなぐ・つながるプロジェクト」10月23日（木） ・4年生大谷地米の販売、防災クイズ、作文発表、合奏披露 ・5・6年生SDGs関連商品販売 防災学習の発表 ・保護者、お世話になった地域の方、CS委員さんを招待して活動内容を伝える。 ○石巻市総合防災訓練 11月9日（日） 各地区でのあいさつ・しめ縄の贈呈、各地区の防災訓練参加	   
まとめる	○「マップを完成させよう」 ・分かったことを整理する。 ・地図上にシールを付けたり、タイトルや吹き出しなど分かりやすいマップになるように工夫をする。 ・グーグルマップにも情報を示し、持ち出せるようにする。【4～6年生・1時間】	 
見つめる	○「学習活動を振り返ろう」 ・学習に対する自己評価、相互評価を行う。Google フォームを活用 ・活動を通して気付いたこと、感じたこと、学んだことなどを、これからの自分にどう活かすかを振り返る。【4～6年生・1時間】	

5 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○マップ上に過去の訓練や学習内容を時系列で配置したことで、単発の活動に終わらず、これまでの経験を現在の防災行動に結びつけ、「点」から「線」への学習の体系化を実現することができた。

○地域住民との対話や伝統文化（しめ縄作り）を通じた交流により、世代間を超えた絆が深まった。これは災害時の相互扶助（共助）の土台となる「地域愛」と「連帯感」を育む貴重な機会となった。

●マップ作りで得た知見を、登下校等の日常的な場面に活かしていくことが肝要である。個々の状況を反映した「マイ・タイムライン」の策定など、一人一人が実際の避難行動を具体的にイメージできるよう、学習をさらに深めていく試みが考えられる。

6 復興・防災マップの取組に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	A	Google フォームを使って送信された児童・保護者の目線による通学路のリスクを把握することで、教員側がより広い視野で防災教育を捉えるようになった。実践性の高い多様なシチュエーションを想定した訓練や現実の災害に近い状況を意識することができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	子供たちと地域住民の間で「顔の見える関係」が築かれた。しめ縄と防災活動を組み合わせることで、交流が生まれ、地域文化の担い手としての意識をもつきっかけになった。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

復興・防災マップの取組

石巻市立桃生小学校

1 ねらい

- ①学区内の危険箇所や避難場所について理解する。(知識・技能)
- ②学区内で災害にあったときの対応の仕方について自分で課題を立てて調べ、考えたり発表したりすることができる。(思考力・判断力・表現力)
- ③学区内で災害にあったときの対応の仕方について、主体的・協働的に取り組み、安心・安全な町にしようとする態度を養う。(学びに向かう力、人間性等)

2 テーマ

「私たちにできること ～未来の安心・安全な桃生町を目指して～」

3 指導時数 3 2 時間

4 指導の流れ

段階	時数	主な学習活動
つかむ	4	①災害について知っていることを話し合う。 ②東日本大震災について学ぶ。 ・図書室の資料や、映像の視聴 ・教師の体験談等。 ・おうちの人へのインタビュー ・東北大学教授 村山良之先生による講話  村山先生による講話
深める	1 1	③防災マップ作りについて知る。 ④自分たちが住んでいる地区について知る。 ・危険箇所、避難所、避難経路 ・ハザードマップで桃生地区の災害リスクを確認する。 ⑤震災遺構門脇小学校を見学する。 ・被害状況や命を守るための対策、設備等について学ぶ。  震災遺構門脇小学校見学 ⑥市の防災訓練に参加 ・避難経路、避難にかかった時間、避難手段 ・避難所の様子（収容人数や備蓄品等）を確認する。 ⑦これまで調べたことを生かし、安心・安全な町にするために必要だと思う防災設備やグッズを考える。
まとめる	1 7	⑧マップ作りを行う。 ・「現在の様子を示したマップ」と「安心・安全な未来を館上げたマップ」を作成する。

まとめる		・マップ作りを通して、学んだことや気付いたこと、これから生かしたいこと等の感想を書く。 ⑨防災マップの発表会を行う。 ・保護者へ向けて、調べたことをグループごとに発表した。   防災マップ作り 防災マップ発表会
------	--	---

5 成果と課題（○：成果 ●：課題）

- これまで漠然としていた「防災」への意識が、具体的で身近なものへと大きく変化した。
- 大学の先生から専門的な立場でお話を聞くことで、災害（地震や津波）が起こった時に想定されることや、地域特性に応じた備えなどを理解することができた。
- 自分たちの地域で起こり得る災害に対し、防災を「知識」として学ぶだけではなく、「行動」につなげる意識を高めるきっかけとなった。
- 震災遺構の見学を通し、写真や文章だけでは伝わりにくい被災の現実を実感することで、災害は決して他人事ではなく、自分たちの生活と隣合わせにあるものだとして強く実感するようになった。
- 防災マップ作りの過程で、自分の住んでいる地域に改めて目を向けるようになり、危険な場所や避難経路に気付くことができた。これまで何気なく通っていた道や場所も、防災の視点で見ることで新たな意味を持つようになった。
- 防災を自分事として捉え、日常生活の中で考える姿勢が身に付いた。
- 統合により、扱う範囲が広範囲となり、事前の準備として桃生地区全体について一つ一つ深く掘り下げることは難しかった。
- 地域ごとの地形や人口構成、過去の災害経験の違いなどを細かく反映させるには、情報量や調査時間が不足していた。
- 地域ごとの災害経験談を聞く活動が少なかったため、より身近で具体的な防災へつなげていくことに課題が残った。

6 復興・防災マップの取組に係る評価

	項 目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	桃生地区における災害時の危険箇所や避難行動について理解を深めることができた。
2	児童生徒の防災意識や技能	A	自分事として捉え、避難行動として必要なことや、今から家庭のできる対策などについても考えることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

復興・防災マップの取組

石巻市立万石浦中学校

- 1 ねらい
 - ・防災マップ制作をもとに、地域に対する理解を深めるとともに、地域を見つめ直す機会とする。
 - ・有用な情報を整理してまとめることで、震災発生時に自助・共助・公助の視点に基づいた、適切な行動をとることのできる力を養う。
- 2 テーマ 「つなぐ ～私たちの万石浦～」
- 3 指導時数 計20時間

4 指導の流れ

(1) 防災マップ作成委員会の立ち上げ

- ・メンバーの確認（3年生7名、2年生15名、1年生5名）
- ・テーマの決定「つなぐ ～私たちの万石浦～」
- ・まちあるきでの調査の確認

生徒会執行部を基盤として、有志での参加を募ったところ、2年生を中心に多くの生徒から協力を仰ぐことができた。作成に携わるメンバーが確定したところで、全員を集めて今後の流れを確認した。この集まりでは、テーマの決定とまちあるきでの調査内容（こういった記録を集めるか、地域の方へどのようなインタビューを実施するか）を決めることに重きを置いたため、それをどのようにまとめていくかという、具体的な方針については確認することができなかったが、これまでにない「目新しいものを創ろう」と生徒たちと意思疎通を図った。



(2) 東北大学災害科学国際研究所、村山先生との打合せ（1回目）

- ・今後の方向性や予定の確認

村山先生、教育委員会の先生方に御来校いただき、今後の方向性や予定に対するご助言をいただいた。この場に生徒会長と作成委員長の2名の生徒を同席させ、責任感を高めさせるとともに、会議の雰囲気味わわせた。「目新しさ」を表現するために、視点を絞った防災マップを仕上げようと思案したが、具体的な完成像がイメージできず、方向性が定まらずにいた。村山先生より「復興に着目するために、海苔やカキの養殖の方からお話が聞けたら…」というご助言から、この地域ならではのものができないのではないかというアイデアが湧き、大まかな今後の方針が見えてきた。

(3) まちあるき

インタビューのやり方についての事前指導を行った上で、夏休みにまちあるきを実施した。流留方面、垂水方面、塩富方面と3つの班を編成し、インタビューのほか、安全のための設備や危険箇所、避難場所等を撮影した。



(4) 成果の整理

まちあるきにて、撮影した写真の確認とインタビューで得た情報の整理を行った。写真については、目標としていた枚数を撮影することができたが、インタビューについては、猛暑も相まり、十分な情報を集めることができなかった。

(5) 保護者の方へアンケートの協力依頼

まちあるきでの、成果の整理を行った際に浮かんだ反省点を解決すべく、保護者を対象としたアンケートを実施することとした。アンケートを取るに当たって、その内容を生徒と吟味し、震災時の様子や経験、いまを生きる中学生に伝えたいことなど、質問項目を絞るよう工夫した。夏休み明けに全校生徒の保護者宛てに任意での回答を依頼し、回収後に生徒とともに記載内容を見返して分析を行った。

(6) 東北大学災害科学国際研究所、村山先生との電子メールによる打合せ（2回目）

当初は1枚に全ての情報をまとめる予定であったが、生徒とアイデアを出し合った結果、2011年当時の内容と2025年の現在の内容、復興の様子も含めたこれからの未来を想像した内容の3枚構成で作成することが決まった。このことも踏まえて、現段階での方向性や記事に盛り込んだ方がよい内容についてご助言いただいた。活用できそうな地図やWebサイト、諸機関等についての情報も教えていただいた。



(7) まとめ

村山先生からのご助言を踏まえて、生徒と内容を精査し、最終的なまとめを行った。

5 成果と課題（○：成果 ●：課題）

○調べたり、まとめたりする中で生徒が意欲的に取り組むようになり、地域理解を深めるきっかけとなった。

●初めて作成するということもあり、計画や見通しをつけるまでにかなり時間を要した。

●地域に寄り添った内容には、まだまだ足りなかった。

6 復興・防災マップの取組に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の防災意識や技能	B	本地域を防災的観点から見つめ直すことができたが、集めた情報を適切にまとめきれなかったと感じる。
2	児童生徒の防災意識や技能	B	生徒のアイデアをたくさん取り入れたマップに仕上げることができた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

Ⅲ 「交通安全の充実」に向けた取組

実践協力校：石巻市立釜小学校



「交通安全の充実」に向けた取組

石巻市立釜小学校

1 ねらい

交通安全についての知識について具体的な実践活動を通して理解し、日常生活において安全に行動する態度や習慣を養う。

2 テーマ

自分の命は自分で守る意識を高め、危機を予知して回避するために適切な行動をとる力を身に付ける。

3 指導時数

- | | |
|------------------------|---------------------|
| (1) 春の交通安全教室 | …学校行事 1 |
| (2) 釜地域の交通安全を考える | …総合的な学習の時間 10 (3年生) |
| (3) 学校区パトロール・常時指導・街頭指導 | …課外活動 |

4 指導の流れ

(1) 春の交通安全教室

石巻自動車学校の協力をいただきながら、路上歩行指導と自動車学校指導員による事故の様子の実演の見学を予定していたが、雨天のため決行することができなかった。そのため、予定していた指導内容(急ブレーキで止まる距離、運転手からの死角など)について学ぶことができる動画を視聴しながら教室で学習を行った。

(2) 釜地域の交通安全を考える(全10時間)

3年生の総合的な学習の時間において、釜地域の交通安全について考えた。

第1時では、石巻市内の身近な場所で発生した事故のニュース映像や、石巻警察署の交通安全課から提供いただいた釜小学区の事故発生マップを提示することで、実際に身近な場所で事故が起こっていることに気付かせた。

また、保護者と一緒に家の周辺・学区内の危険箇所を探す課題を設定して、児童に加えて保護者も考えたことをワークシートに記入する欄を設けることで、保護者にも交通安全についての啓発を図った。

第2時では、見付けてきた危険箇所を伝え合い、釜小学区で実際に事故が発生した場所をGoogleマップのストリートビューで確認することで、どのような場所で事故が発生しているのか、事故が発生しやすい場所の特徴を考えさせた。



警察署から提供された学区内の事故マップ

第3～4時では、交通安全アドバイザー小川教授の解説を聞き、危険箇所を考える上での視点を持つことができるように、「見通しの悪い」とはどのような状態なのか、どのような状況で「飛び出し」をしてしまうのか、体験を交えながら学習した。

第5～6時では、小川教授に教えていただいた危険箇所の視点を持った上で、Google マップのストリートビューで学区内の様子を見ながら危険箇所を探した。

その後、第7～10時で釜小学区交通安全マップを作成し、学習のまとめを行った。作成したマップは学習参観日や学校行事に合わせて掲示をすることを通して、他学年や保護者に対しても交通安全意識の啓発を行った。



「見通し」の概念について学ぶ様子

(3) 学校区パトロール・常時指導・街頭指導

学校区パトロールは年に4回、PTAや地域団体と連携を図りながら実施し、不審者被害の防止や交通事故防止に努めている。

釜小学区は車の通行の激しい地区で、児童の登下校には十分な注意が必要である。過去には児童が巻き込まれる大きな事故も発生していることから、常時指導として毎月25日を含む1週間を釜小交通安全週間とし、校内放送による呼び掛けを通して安全な歩行や自転車の乗車に対する意識付けを行っている。

街頭指導は、PTAや地域の方々のご協力を頂きながら、学区内の交通量が多い場所で行っている。

5 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

○下学年の実態に応じた学習活動を設定したことで、実感を伴った理解につなげることができた。感覚で動いてしまう場面が多い下学年に対して、見通しの悪い場所や飛び出しの危険について体験を通して実感させたことで、交通安全に対する意識が高まった。

○ICT機器を効果的に活用することによって、効率的に学区内の様子を確認することができた。教室内で実際の場所を確認したことで、フィールドワークを行わなくても限られた時間で広範囲の様子を捉えることができた。

●児童によって安全に対する意識の差が見られる。地域から児童の登下校の様子について苦情が寄せられることもあることから、全校児童が日常的に交通安全の意識を持って登下校できるように、継続的に指導していく必要がある。

●児童だけではなく、保護者に対する交通安全の啓発も必要である。児童の安全意識は保護者から影響を受ける部分が大きいため、保護者に対しても交通安全について考える機会をつくっていく必要がある。

6 交通安全の取組に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の安全意識や技能	B	普段の下校指導や集団下校、長期休み前の安全指導で、危険箇所とその理由について具体的に指導できた。
2	児童の安全意識や技能	B	安全に登下校するにはどのようなことに気を付ければ良いか説明できる児童が増えた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」

Ⅳ 「生活安全（防犯を含む）の充実」 に向けた取組 実践協力校：石巻市立中里小学校



「生活安全（防犯を含む）の充実」に向けた取組

石巻市中里小学校

1 ねらい

- ①校地内に不審者が侵入した場合に、不審者侵入を全校に伝える伝達経路、学級担任以外の教職員の動きを確認し、学級担任を含む全職員で共通理解を図る。（職員）
- ②不審者が侵入した情報を元に、臨機応変に安全な場所に避難する方法について理解する。（児童）

2 テーマ

防犯カメラとトランシーバー、さすまたを活用し、不審者が校地内に侵入したときの対応ができるか、検証する。

3 指導時数 学校行事… 1 時間 学級活動… 1 時間（防犯教室）

4 指導の流れ

時刻	活動の流れ	内 容	☆備考 ◆準備物
		職員室の動き	
10 : 35	1 不審者出没	○第一発見者が、職員室の監視カメラのモニターで不審者（石巻警察署の方）が校地内に侵入したことを確認し、教頭へ報告する。	☆不審者役（石巻警察署の方）にお願いして実施。
10 : 38	2 不審者発見	○不審者侵入の報告を受け、教頭が校長に報告する。校長は、教頭等に対応を指示する。	☆さすまたやほうき等を持ち、現場に急行する。
10 : 40	3 対応の指示	○教頭の指示を受け、事務職員と教務主任が昇降口へ行き、不審者の様子を観察する。	◆さすまた、ほうき、はしご、椅子、防刀手袋、催涙スプレー、トランシーバー等
	4 緊急放送対応	○不審者がインターフォンを鳴らしたため、教頭が職員室で応答し、その後、昇降口へ行き、不審者に対応する。 ○警察へ通報する。始めに養護教諭が不審者侵入の旨を警察に通報し、次に事務職員が犯人の特徴等を通報する。 ○教頭の指示を受け、教務主任がトランシーバーで教職員に応援を要請する。 ○教務主任が校内放送で全校に避難指示を出すとともに、応援職員はさすまたをもって現場に急行する。	
		校内放送 「不審者が〇〇（場所）に侵入。直ちに避難行動を取って下さい。」	トランシーバーでの報告の仕方 「〇年生です。在籍〇名、欠席〇名、〇名全員無事避難完了しました。」 ※1年生から順番に報告する。
10 : 50	警察到着 身柄確保	○校長が、担任に児童の避難完了の報告をするよう指示を出す。担任から報告を受ける。 ○養護教諭は怪我をしている児童の対応をする。	
10 : 55	訓練終了の周知	○校長、事務職員は、職員室で警察の到着を待つ。 ○警察官が到着し、不審者の身柄を確保。	
11 : 00	警察の方による全体指導 （校内放送）	○教頭、教務が警察に不審者の身柄を引き渡す。教頭は校長に報告する。校長が避難解除を指示。 ○事務が校内放送で避難解除を周知する。	

時刻	活動の流れ	教室での動き（学級担任、児童）	☆備考 ◆準備物
10：41	1 避難行動開始	○不審者侵入の知らせを受けて、担任は児童をすぐに教室に入れる。 ・1年生と特別支援学級児童…2階5年生フリースペースに移動 ・2年生…2階3年生教室に移動 ・5年生、6年1組児童…ベランダを通して6年2組教室に移動 ○現場に向かう担任は、学級の児童の在籍と欠席状況について、教室に残る担任に伝えてから現場に向かう。 ○教室に残る担任が教室のドアを施錠し、バリケードを作る。カーテンを閉め、出入り口から離れたところで児童を静かに待たせる。	☆不審者との距離を取るため、一階教室の児童は二階以上の教室に避難する。 ☆児童を移動させた後、教室に残る担任が教室付近の窓やドアの施錠、バリケード作りを行う。 応援に向かう担任は、トランシーバーで不審者の情報を共有しながら、さすまた等を持って現場に急行する。
10：50	2 避難行動完了の報告をする	○校長の避難完了の報告の指示を受け、トランシーバーを使って避難行動が完了したことを報告する。 （報告の順番：1年生→特別支援学級児童→2年生→3年生→4年生→5年生→6年生）	
11：00	3 振り返り	○訓練終了後、訓練の振り返りを行う。児童が落ち着いて話を聞くことができるよう、指示を出す。	

5 成果と課題

- トランシーバー等を活用し、不審者の特徴等について、職員間で共有できた。
- さすまたの本数が十分あり、複数人で対応したため、短時間で取り押さえることができた。
- 不審者に対して、落ち着いた声掛けができていた。
- 避難完了を報告する際に、担任が在籍数なども伝えていたのが、具体性がありよかった。
- 不審者が別の場所から侵入した場合の避難経路を考慮しておく必要がある。
- 警察への通報は、携帯電話など固定電話以外の方が、通報者も緊急時に避難することができる。
- 不審者が侵入した現場から応援を求める際は、「何のために応援に来てほしいか」を明確にする必要がある。



6 生活安全の取組に係る評価

	項目	評価	評価に係る具体的な姿・根拠等
1	職員の安全意識や技能	A	不審者対応研修会で得た知識を、実践でも発揮することができていた。職員間で連携し、不審者に対応する様子が見られた。
2	児童の安全意識や技能	A	当日は欠席者もおらず、不審者訓練に意欲的に取り組む様子が見られた。また、訓練では私語がなく、落ち着いて避難行動をとることができていた。

A「大いに高まった」 B「やや高まった」 C「変わらない」 D「低下した」